

田辺市のひきこもり支援

(窓口開設14年目の報告)

平成26年4月～平成27年3月

和歌山県田辺市

目 次

I.	田辺市におけるひきこもり支援	
	1. 田辺市ひきこもり支援について 1
	2. 田辺市ひきこもり相談窓口 紹介ビラ 4
II.	田辺市ひきこもり検討委員感想 5
III.	平成 26 年度 支援の実際	
	1. 相談実績15
	2. 支援の報告	
	(1) 家族会(ほっこり会)21
	(2) 青年自助会実績	
	(3) 啓発活動・視察・問い合わせ22
	(4) ひきこもり支援啓発講演会23
	(5) 行政局講座(本宮行政局)35
	(6) 田辺市ひきこもり検討委員会 議題／活動39
	(7) 中学校での取組について40
	(8) ひきこもり検討委員会 講義41
	3. 田辺市ひきこもり相談窓口担当者感想53
IV.	参考資料	
	1. ひきこもり家族会 ほっこり会 紹介ビラ57
	2. NPO法人 ハートツリー 紹介ビラ58
	3. NPO法人 かたつむりの会 紹介ビラ64
	4. NPO法人 共生舎 紹介ビラ65
	5. 田辺市ひきこもり検討委員会 設置要綱／委員構成66

I. 田辺市におけるひきこもり支援

＝ひきこもり支援を予防の視点から考える＝

田辺市におけるひきこもり支援は、平成27年1月で14年目を迎えました。

国は、子ども・若者育成支援推進法(以下「法」という。)に基づく大綱「子ども・若者ビジョン」により、子ども・若者の健やかな育成や、子ども・若者が社会生活を円滑に営むことができるようにするための支援に関する施策を推進しています。

平成27年度には、法及び大綱の5年後の見直しが予定されており、子ども・若者育成支援推進点検・評価会議において、大綱の総点検が行われています。そこでまとめられた大綱に係る課題や今後の方向性は、以下(1)から(6)のとおりです。

- (1) 子ども・若者のライフサイクルを見通した重層的な支援ネットワークの構築
- (2) 家族に対する支援の充実強化
- (3) 地域における多様な担い手の育成
- (4) 子ども・若者とメディア，企業行動
- (5) 子ども・若者が自らの心・身体を守ることができる力の育成
- (6) 当事者である子ども・若者の参画

このうち、(5)に関して、「子ども・若者が自立した個人としての自己を確立し、また、その個人としての尊厳が重んぜられるためには、まず、子ども・若者が自らの心・身体について、発達段階に応じ、正しく認識し、その主体として自己制御・自己調整する力を身につけられるよう支援していくことが必要である。例えば、自らが困難を抱えた場合の相談先や解決方法などについての子ども・若者に対する教育・広報啓発を強化する必要がある。」とあります。

田辺市ひきこもり検討委員会では、今年度、支援の課題の一つである「不登校・中退からのひきこもりの予防」について、具体的な取り組みを協議しました。その中で、新たに、中学生に対し、ひきこもり相談窓口や支援機関の周知を目的として「中学校での取組」を実施しています。(詳細は、40頁)

上記の国の評価会議にもあるように、困難を抱えた時にその相談先について知り、自ら解決につながる行動を起こすことができれば、早期に相談機関につながり、不登校や未就労からのひきこもりを予防することができるのではないかと考えます。委員会では、来年度以降も「中学校での取組」を継続して実施する予定です。

また、ひきこもり支援の課題として、必要な方に窓口や支援機関の情報が届いているか、高校や大学の中退者をどうとらえていくか、再就職までの期間に中間就労の場が必要などが挙げられます。これらについては、保健・福祉・教育・雇用の分野で互いに連携を図りながら、取組を考えていくことが重要です。

田辺市のひきこもり支援は、この14年の間に、少しずつ広がり発展しています。今後も窓口を訪れた若者や家族が、つながりを切らさずに前を向いていけるよう、関係機関と連携し、共に歩んでいきたいと考えます。

ひきこもり支援の経過

平成 9 年 6月	議員一般質問
平成 13 年 1月	田辺市ひきこもり検討委員会を設置
平成 13 年 3月	ひきこもり相談窓口の開設(保健師 1 名専任)
平成 13 年 4月	田辺市ひきこもり検討小委員会の設置
平成 14 年 5月	HAPPYが、ハートツリーハウス開所 社会的ひきこもり青年の居場所活動開始(国・県より補助金)
平成 14 年 6月	田辺市ひきこもり家族会の設置
平成 16 年 1月	田辺市ひきこもり青年自助グループの育成(月2回)
平成 16 年 3月	ひきこもり相談窓口担当者1名増員 2名(保健師・相談員)体制に
平成 16 年 4月	田辺市ひきこもり家族会が自主運営
平成 17 年 4月	ひきこもり青年自助会(知音CHI-IN)が開始(週 1 回)
	ハートツリーハウスが、「ひきこもり者社会参加支援センター」 運営事業補助金を受けて運営(県・市の補助金)
平成 18 年 10月	ハートツリーハウスがNPO法人認可 ハートツリーに名称変更
平成 20 年 8月	NPO法人ハートツリーが南紀若者サポートステーション開設
平成 26 年 4月	南紀若者サポートステーションが若者サポートステーション With You 南紀に名称変更 (県より若者総合相談窓口 With You 事業が委託されたため)

※ ひきこもり青年自助会(知音CHI-IN)は平成 21 年度より休会中。
参加者がいる場合、再開。

田辺市ひきこもり支援ネットワーク

- ◆ 官民を超えたひきこもり支援対策の構築
- ◆ 事業報告・計画への意見
- ◆ 視察・講演会等への協力
- ◆ 対応が困難な事例の相談
- ◆ 委員の学習会

ひきこもり検討委員会 (年2回)

市担当課(商工・福祉)
紀南児童相談所
田辺市教育研究所
田辺市養護教諭研究会
和歌山県教育センター
学びの丘
高校
紀南こころの医療センター

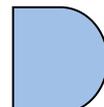
ほっこり会(家族会)
知音 CHI-IN(自助会)
精神科医師
学識経験者
NPO法人かたつむりの会
NPO法人共生舎
(公社)白浜・田辺青年会議所

ひきこもり検討小委員会 (月1回)

市担当課(保健・福祉・教育)
田辺保健所
紀南こころの医療センター

やおき福祉会
ふたば福祉会
NPO法人ハートツリー
(ひきこもり者社会参加支援センター
ハートツリー)
南紀若者サポートステーション
学識経験者
臨床心理士会

※  は公的機関

 は民間機関

ひきこもり相談窓口

ご家族・ご本人さんだけで、悩んでいませんか？

- 不登校のまま卒業・・・
- 中退後自宅中心の生活をしている・・・
- 進学、あるいは、就職したいけれど途中で社会参加をしていない・・・

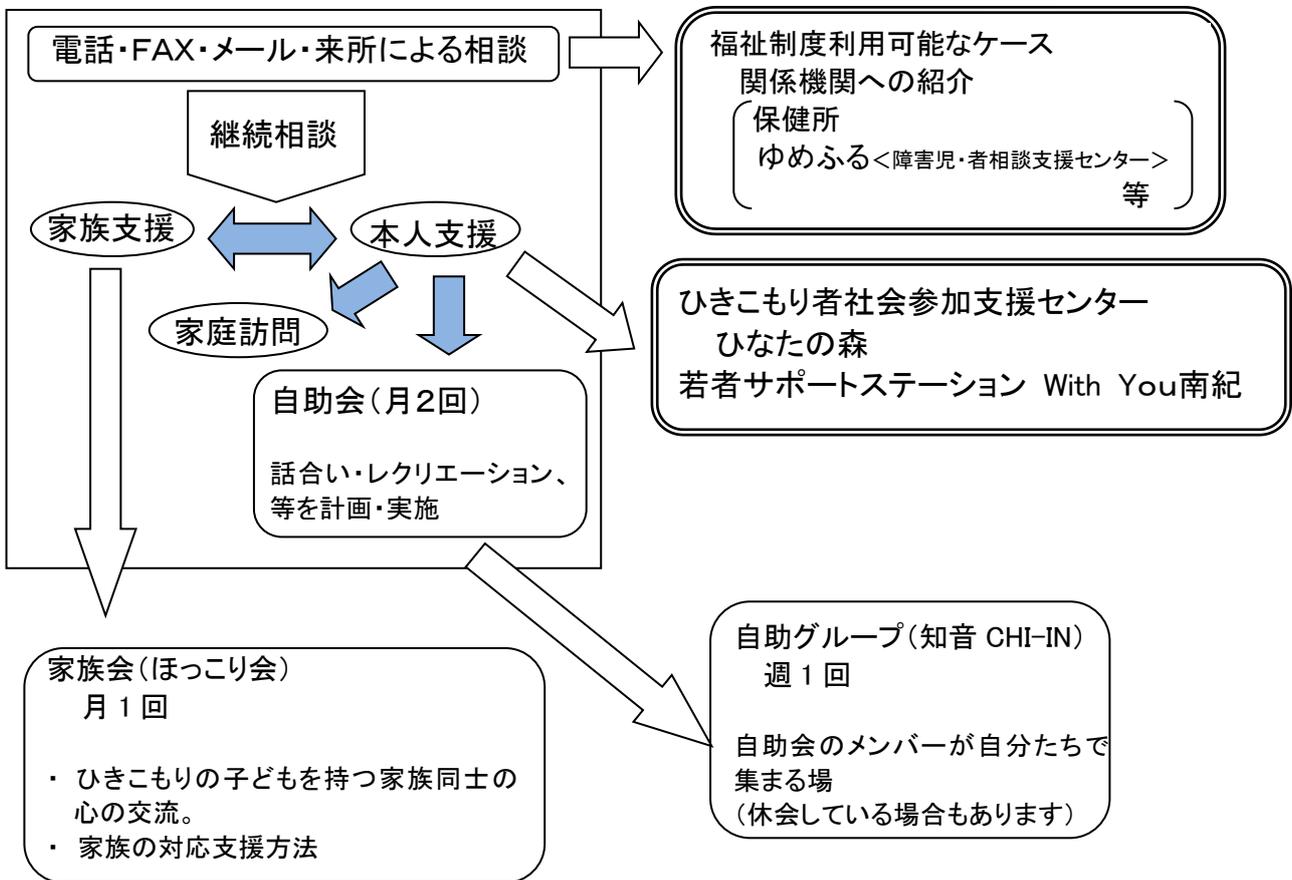


まずは、電話・メールをいただけませんか？

相談を定期的に続けていくうちに徐々に元気を取り戻していきます。
 自助会、家族会（ほっこり会）があります。
 会への参加は、相談窓口担当者がお会いした後、紹介させていただきます。



相談の流れ



問い合わせ先

田辺市健康増進課

TEL : 0739-26-4901 (平日8:30~17:15)

TEL・Fax : 0739-26-4933 (ひきこもり相談窓口専用)

E-Mail : shc@city.tanabe.lg.jp

Hp : <http://www.city.tanabe.lg.jp/kenkou/hikikomori/index.html>

※ 保健所にも「ひきこもり」相談窓口があります。

田辺保健所 TEL 0739-22-1200 (代表) (平日9:00~17:45)



II. 田辺市ひきこもり検討委員感想

『ひきこもり検討委員会 26 年度まとめ』

田辺市ひきこもり検討委員会 委員長

社会福祉法人やおき福祉会 西脇 潤

ひきこもり検討委員会での取り組みを、振り返って思うところであるが、今年度の取り組みの中で印象に残っているのは、なんといっても秋の啓発講演会である。講師の菊池先生による、過疎の町での地道な取り組みや制度のない中で今ある資源を最大限に活かし活用する姿勢や行動力に、とても共感し、楽しく聞くことが出来た。またそれ以上に感慨深かったのが、その前段に行なわれた「不登校児童」による演劇である。かつて、または今も学校に通えず心を閉ざしがちであったであろう児童たちが大勢の観客の前で堂々と演技を披露する姿はそれだけでも、胸を打つものがあった。

また、講演会以外でも中学校を訪問しての「人生グラフ with コラージュ」の取り組みなど、若年層に目を向けた具体的な取り組みが出来たことは大きな成果ではなかっただろうか。

毎月の小委員会に出席させてもらう度に思うことではあるのだが、田辺市ではひきこもりの支援に関連する機関・事業所・行政の整備や連携がとても充実してきており、居場所の提供から家庭訪問、就労支援など多岐なサービスが展開されている。

そうした機関・事業所の充実を感じると共に、いまだに多くのひきこもり青年が多様な相談を寄せている現状に対し、今後のひきこもり検討委員会がどのような役割を果たしていくことが必要なのかを、今一度再考すべき時期に差し掛かっているように感じる。

今年の検討の中で、今後継続して考えていかねばならないと感じたものが「予防的取り組み」と「慢性高齢化した要支援者への支援」である。

「予防的取り組み」に関して思うこと。

ひきこもりの問題を解決する根本的な対策が、いかにしてひきこもり状態になる青年を減らしていくかである為、ひきこもりになる前の児童、保護者にさまざまな形で情報伝達・啓発を行なうことで、自身や知人がひきこもり状態になったり、なりそうになったときに、早期の相談に繋がるのが重要と考えている。しかしながら、「ひきこもり」という用語自体が状況や状態を示すものであり、それそのものが病気や障害ではない為、初期の段階(学業不振・家庭内の不和・孤立感などによる一時的な集団社会からの逃避や避難)では、家族や本人が「いずれ元気になるだろう」と積極的に専門的な支援を求めないケースが多いように感じる。その結果、自然と回復する場合もあるが、時間の経過とともに重篤なひきこもり状態になってしまったり精神疾患を患ってしまうことも多々あるようだ。初期の状態の時に、どう対処するかは本人や家族の自主的な判断に任せるしかないことが多いので、思春期の本人や家族が予備的な知識をもつことは非常に重要である。検討委員会としては、従来どおりの啓発活動を地道に続けていくとともに、体験型イベントや学校訪問による特別授業といった親しみと経験を伴うような活動を支援していければと思う。

「慢性高齢化した要支援者への支援」

先述したひきこもりに対する支援体制が強化されてきたなかで、20 年前なら家庭にひきこもり続けていたであろう方も、就労支援や訪問支援といったサービスを受け、社会に参加出来るようになってきている。そのため、ひきこもり状態からの脱却を自ら望んでいる方が在宅のまま過ごすことは少なくなってきているように感じている。一方で、自ら主体的に社会との接点を拒んでいる方(家族含む)に関しては、有効な支援が展開できずにいるのではないだろうか。こうした方の特徴としては①課題の先送り(経済的に余裕のあるうちは我慢する。いずれは自然と状況が改善すると楽観視している。家族同士で課題に向き合うことで生じる軋轢を避けている)②意欲減退(自分の能力に限界を感じ諦めている。無理に社会と関わりたくない。等)があるように思う。当たり前のことではあるが、検討委員会であれ、これに参画している事業所であれ、本人からの支援の依頼なく個人の生き方に介入すること

は出来ない。そうした結果として、本人や家族の『限界』を超えた時点になって初めて相談や支援の依頼となることが多い。こうした場合は、適切な時期に支援を行えなかった為に回復が困難であったり、状況改善に時間が掛かったりしてしまう。こうした相談等に至っていない予備軍的な存在が相当数いると推測されており、今後このような方にどう働きかけていくかが課題となっていると感じている。

上記以外にも、いろいろと感じる部分はあるのだが、そもそも、なぜひきこもりが問題なのかと考えたときに、地域経済的な側面で考えると労働力の低下、税収の減少、社会保障費の増加(生活保護を受給する場合等)といった悪影響が挙げられる、またコミュニティの側面から考えると、地域のつながりや住民の相互扶助の輪に入らないことや同居する家族の消耗などが挙げられる。と、ここまで列挙した部分だけを見ると「ひきこもり」はまるで社会悪のように見える。確かに、影響の大きさはともかく、地域社会に対してプラスの要因ではない。では、ひきこもり検討委員会では、地域への悪影響の排除のためにひきこもり問題を検討していくのかといえそうでもないように思う。

うまく説明できなくて申し訳ないのだが、人である以上誰にだって、大小さまざまなつまづきや葛藤があり、時には休みたくなる時だってあるであろう。けれども、たいていの場合は、自身の力であったり、周りのサポートにより再び、学校や家事・仕事に復帰できる。ひきこもりの状態にいる方は、たまたまその復帰のプロセスがうまく機能せず、長期化していると認識してみるとどうだろう。何が言いたいかであるが、つまり誰にでもひきこもりなる可能性があり、自分でなくとも、家族や知人がそのような状態になってしまうこともあるということである。そして、その原因や責任は本人や家族にあるとは限らない。ということである。

本来順調にいけば、同じ地域の住民として、経済活動やコミュニティ活動において活躍できる方が、なんらかの理由でひきこもっていることを残念な結果としてとらえ、予防や早期対応の体制を公的に確立していくことの意味は、自分も含め、家族や知人が安心して暮らせる地域を作っていくということに繋がっていくのではないだろうか。

そして、こうした意識やひきこもりという状態が長期化することの悪影響を、さまざまな分野や地域の方と共有していく取り組みを進めていくことが、今後のひきこもり検討委員会の役割になっていくのではないかと考えている。

『ひきこもり支援を振り返り・・・』

田辺市ひきこもり検討委員会 副委員長

南紀若者サポートステーション 南 芳樹

今年は私が NPO 法人ハートツリーの職員(現在は南紀若者サポートステーションに所属)して、不登校・ひきこもり支援に携わって 10 年目となり、私にとっても大げさではありますが、節目の年となりました。

その中で、これまでの支援を少し振り返り、困難な状況にある若者の現状をお話することをひきこもり検討委員の報告とさせてもらうことにします。

あくまで、関わる青年の一側面の話ではありますが、私が関わっている若者の多くの課題の根底にあるものの一つとして、「承認欲求」つまり他者から認めてもらいたいという欲求が非常に高くあることを実感しています。

これは、不登校・ひきこもりの課題を持つ若者だけではなく、サポートステーションが支援の対象とするいわゆるニートと呼ばれる若者にも共通していることではないかと感じることがあります。

彼らにとって、「他者から認められる生き方」こそが重要であり、それが出来ないことに対しての自己否定や空虚感を感じ、社会へ出ていくことへの困難さを感じる事が大きな課題の一つになっている側面があるように感じます。

しかしながら、「他者からの承認基準」はどこまで行っても上があり、その基準が満たされ

ることはほとんどありません。という事はゴールもないのに常に前に進まなければなりません。

そんな生き方ではいつか疲弊し、ダウンしてしまうでしょう。

大事なのは他者からの評価や尺度ではなく、自分の中での「承認基準」をどう持つか？ということに尽きるのではないかと私は考えます。

私自身が支援の中でポイントとしている点としても、本人の進む道を支援者が評価するのではなく、本人自身が自分の「生き方」を認めていけるために何が必要かを常に考えるように関わりを持たせてもらっています。

今年は、「アナと雪の女王」の映画の主題歌「LET IT GO」が大ヒットし、「ありのままの姿でいいの」という歌詞に子どもから大人までもが共感し、感動したところに現在社会が持つ「生きづらさ」が見え隠れしているのではないかと強く感じています。

みんな、それぞれ、ありのままにいられる「居場所」を求めています。

強さも弱さも認められる。そんな居場所や支援をしていけるように今後も私自身、頑張っていこうと思います。

ありがとうございました。

『ひきこもり検討委員会感想』

田辺市ひきこもり検討委員会 副委員長

社会参加支援センターハートツリー 長瀧 信子

2014 年度

年2回の大委員会会議の前には、どのようにすればうまく伝わるのかいつも頭を悩ませています。

また年1回の行政局講座でも、ひきこもりのことが分からない方にはあまり伝わっていないのではないかと、反省しています。ひきこもりの方はそれぞれ状態がちがうため、手短かに説明するのは難しいです。

今後の私の課題と捉えています。

啓発講演会では秋田県藤里町社会福祉協議会事務局長の菊池まゆみさんの講演、新しい試みで不登校の子供たちの演劇も開催されたことで躍動感のようなものを感じられました。

また、こころの医療センターの東さんと一緒に市内の中学校での「人生グラフ with コラージュ」の取り組みに参加できたことが印象的でした。居場所では 20 歳以上の青年たちと接することが多く、「もっと早くに出会い、困ったことや悩みを聞いていたらこの子たちの人生はちがっていたかもしれない」と、日々感じています。だからこそ、中学校、小学校での関わりをもっと持っていけたらと思っています。

今年度ありがとうございました。新年度もよろしく願います。

『壁訴訟っぽいけど…ちょっとひとこと』

学識経験者

布袋 太三

実は毎年この時期になると、もうそろそろ検討委員を辞めさせてもらってもいいよなあと思いはかなり本気で考える。後ろ向きで申しわけないが、今年もやはりそうだ。もっと鮮度の高い優秀な人材に代わっていただきたいと本当に心から思っている。

まあ、そういう思いは思いとして、最近少し気になっていることを以下に遠慮がちに述べてみようと思う。

ひとつは、私が数年前のこの冊子で県下のひきこもり支援の新しい流れのようなことを書いたことについて、このところどうもそのことがほとんどうまく行っていないのではないかと

気になっている。

当時、県の「ひきこもり者社会参加支援センター」が県下8圏域の連絡協議会を精力的に開催し、各地域のひきこもり支援の組織整備と支援者たちの実践的議論の場を保障しようとしていた。しかし、その後この連絡会議が不定期であることから(尤も、定期的な開催などもともと考えてなかったのかもしれないが)、県下全域へのひきこもり支援の網の目はところどころ密度を粗いままにし、県センターと地域センターとの関係も、そして、何より地域の関係機関や支援者たちの交流も沈滞気味となってしまった。

いろいろな事情があると思うが、県の「センター」としては、せっかくなつた8圏域の連絡会議は毎年きちんと開催した方がいい。それと適切な支援者向け研修もセットにして開くと面白い。再び精力的に動いてくれることを期待したい。

県がらみのついでに言うと、県当局の担当部署(障害福祉課)と支援現場との話合いがなかなか思うに任せないという点について少々愚痴りたい。

支援現場が県当局に要望したいこと、聴いてもらいたいことはとにかくいっぱいある。

そこで、もっと現場の声をていねいに聴く機会を用意してほしいのだ。現場のスタッフは薄給でかつ将来の保障もないところで自己犠牲的に働いている。そんな彼らの熱意が県下のひきこもり支援を支えていると言っても言過ぎではない。昔はよく県の担当者が田辺のひきこもりの居場所などを訪ねてくれた。支援の前線にいるスタッフたちがどんなことに困っているのかいろいろと聴いてくれたし、担当者もそれなりに勉強した。そういうのが最近ほとんどないのだ。

あえて言いたいのが、担当者はもっと足しげく支援現場を訪れ、実情を体感してほしいと切に思っている。

もうひとつ、当時、「ガイドライン」や「子・若法」をめぐって、民間の支援者たちの連絡会議が再開されたことについては私はかなり手放しで希望的観測を吐露した。

しかし、これもその後ほとんど開催されることがなくなった。かつてはずいぶん盛んに交流し、お互いに日々の貴重な実践の糧とした。民間ならではのフットワークとか苦労とか、それにさまざまなノウハウを忌憚なく提示し共有しあっていた。ひきこもり支援などという活動は当然にも孤立してできるわけがない。私は再々開を強く望んでいる。

さて、これから後はもう言い古されていることだがあえてふれてみたい。

ひとつは「田辺にひきこもりは何人ぐらいいるのか」という点についてである。

概数だけを求めることはそれほど難しい作業ではないと思うが実際にはどうだろうか。

学校や民生委員・福祉委員、その他関係機関を通して調査を進めると概ねの数字は出てくるように思われる。たとえば学校との情報連携がスムーズならば中卒時ひきこもりや高校中退時ひきこもりなどの数字はほぼ正確に掴みうる。

また、大学中退や就職後退職し帰省してひきこもった青年も高校の卒業生の追跡調査と地域情報を重ねていけばある程度は見えてくるかもしれない。

具体的な方法などは主管するところで練るとして、やはり支援しなければならない対象がどのくらいいるのかを大まかにでも掴む必要は行政の立場からはもちろん支援者としても必須ではないかと思っている。

それと、先の点とも絡むが「学校との連携を制度化する」ことについてである。

学校は中卒時と高校中退時にひきこもっている生徒を窓口かネットワークのどこかに必ずつなぐとする仕組みをつくってはどうか。

現状は、中卒時ひきこもりはサポステとの連携体制ができつつあるが、高校中退時ひき

こもりの場合は担任教師の個人的判断によるヘルプ要請があってはじめてわれわれとつながるわけで、その他多くの該当者は放置されたままとなっている。

要するに、学校がひきこもり状態の生徒をどの機関にもつなげることなく放出してしまうことを防ぐシステムをできるだけ早くつくっておきたいのだ。

最後に、これは以前にも述べたが、「子ども・若者育成支援推進法」を受けてつくられた「和歌山県子ども・若者支援地域協議会」と「窓口」(ひきこもり検討委員会)との関係について少し細かく述べてみたい。

この「協議会」は困難を有する子ども・若者への支援は従来の縦割りの対応ではなく、官民協同の関係機関のネットワークで推し進めようとするもので、確か法の主旨としてはひきこもり支援やニート支援をその中核としていたと思う。

したがって、結論から言うと、この「協議会」の組織整備が進行していく過程でやがて「窓口」(ひきこもり検討委員会)はそこに包摂されていくということになると考えられる。

ただ、有り体に言うと、この組織の現状は途切れのない支援を謳うに相応しい新たな枠組みをまだ展望していないし、そのための組織的整備を急ぐレベルにもない。

今のところは県下三地域に「若者サポートステーション With You」を設置し、それぞれのサポステ内にウイズユーという総合相談窓口を開設したにとどまっている。

動きとしては地域ごとの連絡協議会を開催して地域の若者支援事情のようなものの把握につとめたり、いくつかの若者支援に絡む斬新なとりくみを各地でプロモートしている。

主管する青少年課の動きは極めて活動的であり、実際、現場のわれわれも得るものが多い。しかし、どうも次への構想がまったく見えてこない。役所中心の既成の子ども・若者支援の取り組みや足腰の脆い民間の取り組みをなぞるだけではなかなか今日の「困難を有する子ども・若者支援」を新たな地平におしあげることにはできない。

現在この「協議会」が抱えこもうとしている子ども・若者支援の守備範囲はあまりにも広いし、途切れのない支援は当然にも長いスパンの関わりを不可避とする。

教育・福祉・保健・医療・職業訓練・就労・司法関係にまで及ぶ多様なニーズに応える組織の整備と人材の確保はやはり県当局と当該地域の行政が負うべきことである。

さいわい田辺にはひきこもり支援とサポステと児童虐待防止にそれぞれ関連する機関と専門家が官民のネットワークをつくっている。組織構想と活動方針が提示され、有能な事務局が調整に乗り出せば、すぐにでもこれらのネットワークは動きだすことができるにちがいない。

まずは、県の主管するところが積極的で具体的な組織づくりイメージを提示するべきである。

たとえば紀南地方の「子ども・若者支援地域協議会」の構想を少々粗っぽいのが以下のようにはどうか。

まずはじめに、「組織の構造イメージについての作業準備会」をつくり、1か月ぐらいの期間限定で集中的に議論し結論を出す。

思い付き的だが結論はたとえばこんな風にてである。

- ◇全体の流れを俯瞰し、実効性のある取り組みを立案していく指令室のようなところとして『南紀子ども・若者支援総合推進室』(仮称)をおく。メンバーはネットワークの機関代表と有識者で総数は10名ぐらいとする。
- ◇実際の支援に当たるのは『問題別実務担当者会議』で、不登校・ひきこもり・ニート・児童虐待・発達障害・非行・貧困などの問題を抱える子ども・若者への支援を行う。メンバーは問題別に関係する官民の機関と専門家とする。
- ◇事務の総括や諸会議の連絡調整にあたるのは『事務局』で、ここに有能でネットワークのいい人材が配置されないと組織は形骸化の一途を辿ってしまう。役所は課を越えて人選して専任1~2名をおく。

◇『総合相談室ウイズユー南紀』は電話や来所、あるいは訪問で初回相談を受け、主訴を分析し問題別のどのグループに委ねていくのかの仕分けを担当する。メンバーはサポステと役所から1～2名をおく。

思えば、世間も国家も長い間、困難を有する若者たちを冷遇し自己責任的視線で対応してきたが、ここにきてやっと国家的にもそうした「若者」を無視できなくなってきた。

手をこまねいているとやがて財政上も、ある意味では治安上も多大なコスト高を招じてしまうことを官僚たちも感じ始めた。そこで、やおら今日的な若者事情について耳を傾けざるを得なくなってきたのだろう。

いずれにしても私たちはこうした機運に乗じて以前にも増して現場からのさまざまな提案や要望を発信しつづけ、子ども・若者支援の新たな展開を可能にする組織づくりを押し進めたいものである。

『小さな舞台から見えた微かな光』
—ふれあい教室の創作劇づくりに参与して—
社会福祉法人ふたば福祉会 米川 徳昭

不思議な一年であった。それはこの一年が自分の好きなことをしながら、関わられたことであった。

不登校が通うふれあい教室から依頼をされたのは、不登校の子供たちの創作劇の脚本の執筆だった。2年ほど前に、ふれあい文化祭の前夜祭で、「黒猫シャビの恩返し」という創作劇の脚本を手がけ、興行的には大成功を収めたことから、その関係する人の紹介からだった。

ひきこもりの検討委員でありながら、不登校の子供たちの状況や実態を知っているのは僅かで、しかも、深く関わったことがないのは実際であった。その子供たちと出会った時の印象を言えば、何処となく話しづらく、何処となく幼さを感じていた。打ち合わせの段階で子供たちの様子を聞きながら、この子らに何を演じられるのだろうかという一介の不安ともに閃いたのはジュール・ヴェルヌの「15少年漂流記」であった。

この小説の全てを正確に覚えているわけではないが、無人島で15人の子供たちが一人ひとりの能力を出し合って、島の生活をつくりあげていく姿に感銘し、夢見た時代もあった。つまり、個性豊かな能力と魅力をみんなが持ち合わせていて、それが合わされば、何でもできるというテーマに辿りついたのだ。それが、彼らの第1作である「ボルムとバルンと子供たち」であった。

子供たちが劇をしたいと言う希望からはじまったためか、劇を作り上げる時間は短く集中していた。小さなトラブルやおふざけがあっても修正しながら、形が整っていく。そして、脚本を子供たちが手放した時、自分の言葉で話し出す役者となった。本番の日、学校の先生や自分たちの家族の前で披露した。凜々とした子供たちの表情とは別に、会場は感動と母親たちの涙で溢れていた。

2作目の依頼は直ぐにきた。

第1作の公演で素晴らしい評価をもらった子供たちは自信に溢れていた。おそらく幕が下りた後の拍手喝采の嵐の中で、あのしびれるほどの経験は初めてであろうし、誰もが経験できるものでもない。第2作目は、「教室」を舞台にした。学校へ行けていない子供たちがクラスメイトを演じるという矛盾をぶつけた。それが、「クラスメイト夢太郎」である。

崩壊しているクラスに夢太郎という犬の姿をして妖精が参入し、事件が起きる中でクラスメイトたちがいつしか本音で夢を語り合い、崩れている自分たちの姿を変えようとした時、未来が開けることをテーマにした内容であった。

しかし、一作目とは違い、子供たちの集中には難があった。練習に全員が一同に揃うことがなかったのだ。理由はあるだろうが、公演の日が迫る中で、演技者同士の息が大事な劇

にとって、致命的と感じた。けども、「たいしたもん」である。ふれあい教室の子供たちを支援するスタッフは子供たちのことを知り尽くしているし、信じていた。彼らがこれない時間はうまくつなぎながら、あの日を迎えたのだ。

やはり、あの舞台で見せてくれたのは子供たちの無限の可能性である。今の自分の姿を悩んでいる時間もあるだろう。けども、劇を作ってきた自分たちこそが本当の姿であり、未来を堂々と歩く姿を小さな光の中で少しでも見つけられたと信じたい。

『ひきこもり検討委員になって』

田辺保健所 吉岡 範通

私が田辺保健所に配属になったのが2年前の平成25年4月です。田辺はひきこもりに関して全国レベルで進んでおり先駆的な実践をしているので、とにかく勉強させてもらおうと思い、ときどきしながら初めの会議に参加したのを覚えています。

検討委員会に参加させて頂いて分かったことは、地域に根を張るにはこうすればいいと理解できた事です。例えば、毎年継続されているひきこもり支援啓発講演会では、地域住民の方が毎年この時期にひきこもりの講演会があると分かっており、100名を越える一般市民の方が毎年聴講に来てくれる。継続して講演会を積み重ねる中で、確実に地域住民のひきこもり理解は深まってゆき、また、ひきこもりに対しての偏見が発生しづらい状況になる。地道に継続することがひきこもりに理解のある地域を作ってゆくということを実感しました。また、その他にもひきこもりに関しての様々な活動をしており、支援者と施設が地域で日々のひきこもり支援の活動を行っている。地域が年月を重ねる中で確実に豊かになっている、そんなことを実感しました。

その中で、保健所に身を置く自分がどこまで役に立っているのかよく分かりませんが、みなさんと一緒に連携しながらひきこもり支援に取り組んでゆけたらと思います。今後ともよろしく御願います。

『ひきこもりの予防に向けて』

紀南こころの医療センター 東 知幸

ひきこもり検討委員を務めて7年が過ぎました。第4期目となるこの2年間で最も印象に残っているのは、ひきこもり予防活動の一環として2014年8月に市内の中学校で「人生グラフ with コラージュ」を活用したワークショップを実施したことです。本誌にも掲載されていますが、当日参加生徒に書いてもらった感想文や担任の先生の後日談などから、このワークショップは生徒たちに大変良い影響をもたらしたであろうことが推測されます。

ちょうどこの原稿を書いている頃、「人生グラフ with コラージュ」に関する新論文(東, 2015)が『心理臨床学研究』という学会誌に掲載されることが決まりました。その新論文の内容は「人生グラフ with コラージュ」を活用したワークショップは参加者の気分を改善させる効果の他に、生きがい感を向上させる効果、そして自我同一性(アイデンティティ)を発展させる効果を持っていることを示したものです。

ある研究(草野, 2012)では、ひきこもりの予防には生きがい感を向上させることが重要であると述べられています。また、平成22年に厚生労働省が発表した『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』(研究代表者: 齊藤万比古)では、ひきこもりを3つのグループに分類しています。第1群は精神疾患、第2群は知的障害や発達障害、そして第3群にはパーソナリティ障害、(自我)同一性の問題を主要因とするひきこもりが含まれています。自我同一性とは「自分とは何者で、この社会の中でどのような役割を担っていくのか」という問いに対する自分なりの答え」のようなもので、その確立の不十分さがひきこもりの一要因になりえるということであり、ひきこもりの予防には自我同一性を発展させることも大切であることが分かります。従って、生きがい感と自我同一性を向上・発展させる効果を持つ「人生グラ

「人生グラフ with コラージュ」は、ひきこもり予防に大変適した技法であるといえるでしょう。

もちろん、一つの取り組みだけでひきこもり予防ができるわけではありません。「人生グラフ with コラージュ」を活用したワークショップはひきこもり予防のために投げられた一石に過ぎません。ひきこもり予防のためにどのような方法をどのように組み合わせればよいか、答えは簡単に導き出されるものではありませんが、ひきこもり検討委員としてこれからも考え続けていきたいと思えます。

文献

東知幸(2015). コラージュを組み合わせた人生グラフテストを活用した構成的グループエンカウンターが生きがい感と自我同一性に与える効果. 心理臨床学研究, 33(1), 印刷中.

草野智洋(2012). 大学生におけるひきこもり傾向と人生の意味・目的意識との関連. カウンセリング研究, 45(1), 11-19.

『今期を振り返って』

臨床心理士会 棚橋 育子

今期も委員を務めさせていただき、ありがとうございました。

2年間を振り返ると、今期はひきこもり検討委員会にとって、新しい試みが多かったのではないかと思います。大委員会でのテーマを決めてのディスカッションや、PR のためのDVD 作り、田辺市の適応指導教室に通う生徒さん達の劇、人生グラフを用いての予防・啓発運動など、新鮮な取り組みが増えてきているように感じます。また、年に1度開催している講演会の講師として、ここ2年は実践家に来ていただいたことも、新たな風のひとつだと感じましたし、個人的にもとても意義のある時間になりました。

臨床心理士として仕事をしていくなかで、「ひきこもり状態」にある方のお話を聞くことは多いです。ご本人はもちろん、ご家族もたいへん悩まれ、でもこの状況をどうしたら変えられるのか分からず、苦しまれています。実際問題として、一度ひきこもり状態になられた方が、再び外に出てみよう、頑張ってみようと思われるようになるまでは、時間がかかるケースも多く、非常に難しいと感じます。そこで痛感するのは、やはり「いかに『ひきこもらないようにする』か」という視点の大切さです。完全に家に入ってしまう前に、少しでも外との接点を作っておく、ご本人が難しいならご家族とつながっておく。このわずかな接点が、後に大きなきっかけとなることがあります。その意味でも、この2年間の委員会の取り組みの方向性は、今後もっと重要になってくると感じています。

ひきこもり状態にある方、ご家族への支援と同時に、若い世代の方や地域の方々に向けての予防・啓発運動に力を入れていくことも大きな役割のひとつとして、今後も微力ではありますが、少しでも貢献していきたいです。

『委員になって』

田辺市教育委員会 学校教育課 木村 真由美

学校教育課の担当として、2年間ひきこもり検討委員会でお世話になりました。

ひきこもりの問題において、学校教育が果たす役割は何だろう・・・この2年間、ずっとこの思いがありました。

今年度、中芳養中学校で、臨床心理士 東知幸先生に「人生グラフ with コラージュ」というワークショップを実施していただきました。専門的な分析により、ひきこもり予防として、さまざまな効果があったことを報告していただきました。この取組は大変興味深く、私の心の

中でモヤモヤしていたものが少し晴れた気持ちがありました。

小中学校では、不登校児童生徒を生まない取組に力を入れています。また、不登校や不登校傾向の児童生徒が在籍する学校では、関係機関と連携を図りながら様々な働きかけを行っています。不登校の子どもが皆、ひきこもりになるわけではありませんが、ひきこもりの問題は、不登校問題と深い関わりがあります。そのことをもっと意識することによって、学校から関係機関に繋いだり、当該生徒やその家庭に提供する情報も変わってくるのではないかと思います。

ひきこもり検討委員会に参加させていただき、ひきこもりの支援活動について、さまざまな関係の方々のネットワークにより、地道な取組が行われていることを知りました。山積する課題に丁寧に向き合いながら、支援活動に直接関わっていらっしゃる皆さんのお話は大変勉強になりました。ありがとうございました。

『委員になって』

田辺市教育委員会 生涯学習課 廣畑 明央

地区公民館から中央公民館に異動になって、2年間ひきこもり検討委員会委員として生涯学習課から参加させていただきました。仕事の都合等でなかなか月1回の小委員会には参加することができず、ご迷惑をおかけしました。

小委員会での協議内容は専門的で、自分から発言できることは少なかったですが、生涯学習課として何ができるかと考えた時に、公民館で行う学習会や講演会において、現在、田辺市が行っているひきこもり支援の取組みをできるだけ多くの市民の方に知ってもらうこと、また、ひきこもりについて考える機会を持つことなどが挙げられると思います。

今後におきましても、生涯学習課の立場から何ができるかを考えていきたいと思っています。

Ⅲ－1. 相談実績

1. 相談実績 平成 26 年度

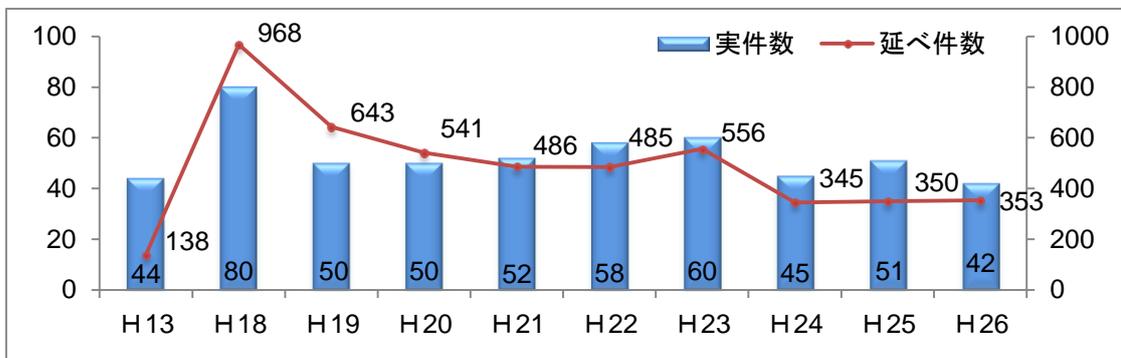
相談窓口開設以降平成 27 年3月末までに 540 家族 561 件の相談がありました。
 (内、平成 26 年度は 18 家族 19 件)

(1) 年度別相談件数

窓口開設の平成 13 年度と平成 18 年からの相談件数の推移を示す。平成 22、23 年度はやや増加している。

平成 26 年度は、前年度に比べて、実件数は減少しているが、延べ件数はやや増加している。

	H13	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
実件数	44	80	50	50	52	58	60	45	51	42
延べ件数	138	968	643	541	486	485	556	345	350	353



(2) 平成 26 年4月～平成 27 年3月までの状況

① 月別相談延べ件数

来所の相談が最も多く、次いで電話相談である。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上半期合計		
電話	23	9	12	5	8	7	64		
来所	22	19	17	16	15	21	110		
メール	2	2	0	2	0	2	8		
訪問	2	0	3	3	1	1	10		
合計	49	30	32	26	24	31	192		
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	下半期合計	総合計	
電話	5	9	8	7	5	6	40	104	
来所	18	14	15	17	20	19	103	213	
メール	2	1	2	2	0	2	9	17	
訪問	0	0	1	3	2	3	9	19	
合計	25	24	26	29	27	30	161	353	

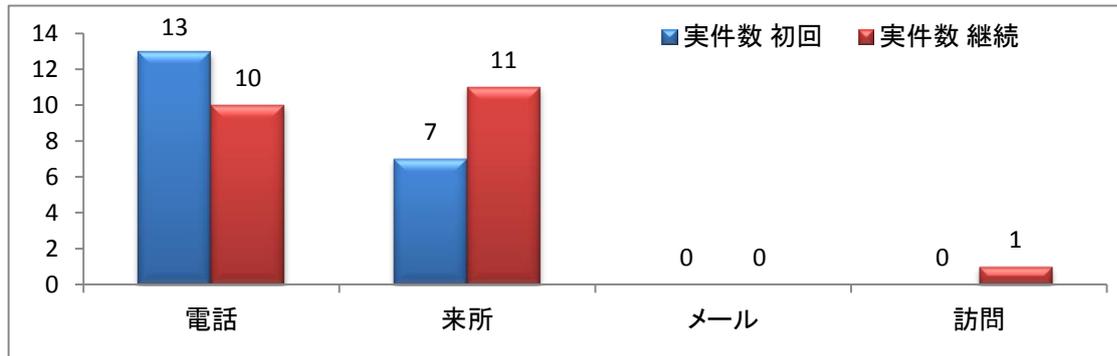
Ⅲ-1. 相談実績

② 相談実件数

相談実件数では、電話相談、来所相談の順に多い。
初回相談は、電話での相談が最も多い。

	実件数		合計
	初回	継続	
電話	13	10	23
来所	7	11	18
メール	0	0	0
訪問	0	1	1
合計	20	22	42

※ 初回は、今年度、初めて来られた方。
(一度終了後、再度相談に来られた方も含む。)
※ 継続は、昨年度より引き続き相談に来られた方。



③ 相談者

相談者は、初回は、母が最も多く、次いで、本人、関係者である。
延べは、本人が最も多く、次いで母が多い。

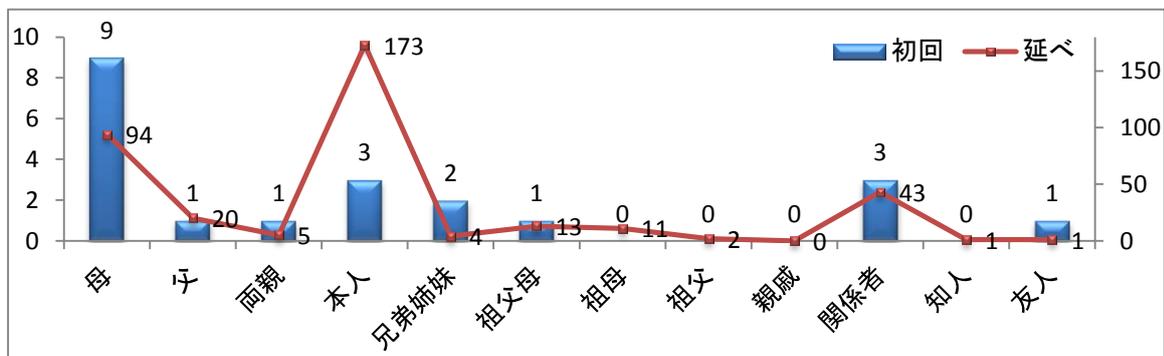
	母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖父母	祖母	祖父	親戚	関係者	知人	友人	合計
初回	9	1	1	3	2	1	0	0	0	3	0	1	21
延べ	94	20	5	173	4	13	11	2	0	43	1	1	367

※ 初回は、1件が重複。

内訳 母・本人(1)

※ 延べは、14件が重複。

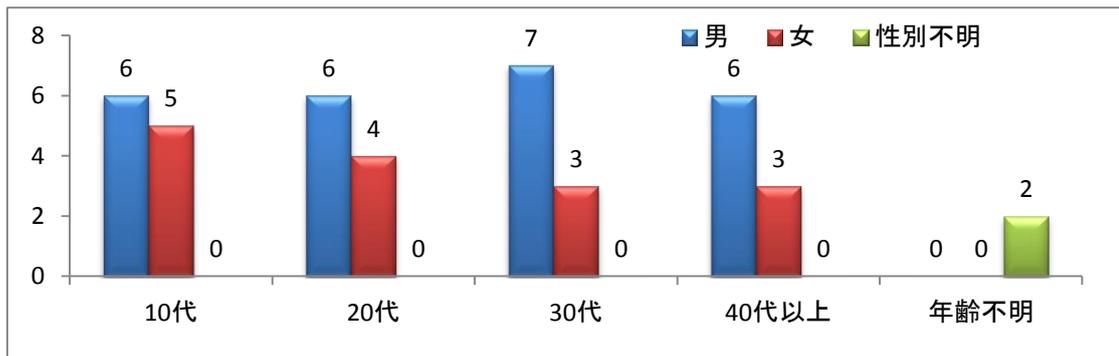
内訳 母・本人(3) 両親・本人(4) 父・本人(3) 父・関係者(1) 母・関係者(3)



④ 年代別男女別件数(42件中)

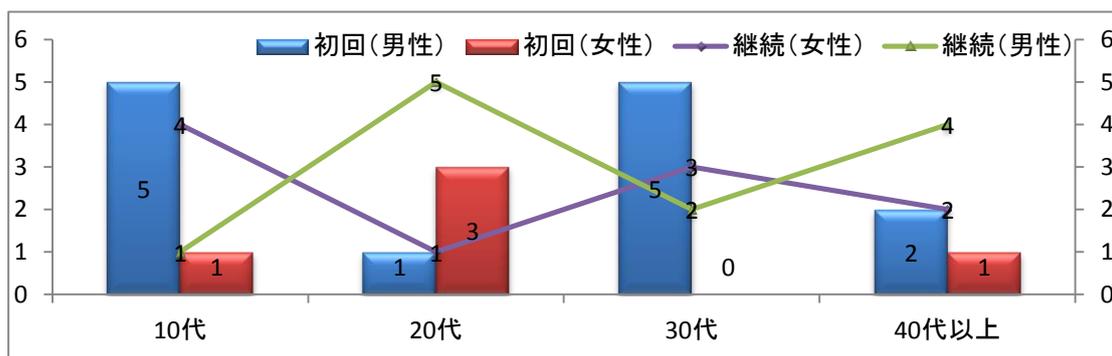
年代別にみても、10代が多いが、各年代とも、ほぼ同数である。

	10代	20代	30代	40代以上	年齢不明	合計	%
男	6	6	7	6	0	25	59%
女	5	4	3	3	0	15	36%
性別不明	0	0	0	0	2	2	5%
合計	11	10	10	9	2	42	
%	26%	24%	24%	21%	5%		



⑤ 年代別(男性 25 件中・女性 15 件中)

	10代	20代	30代	40代以上	合計
初回(男性)	5	1	5	2	13
初回(女性)	1	3	0	1	5
継続(男性)	1	5	2	4	12
継続(女性)	4	1	3	2	10
合計	11	10	10	9	40



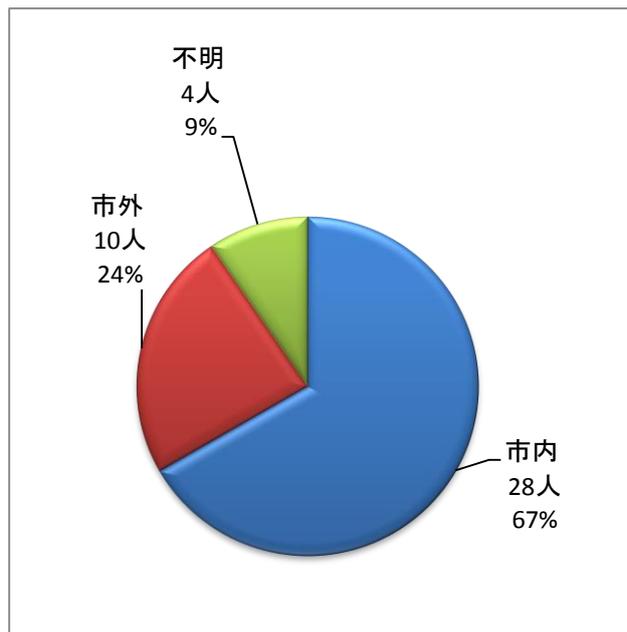
※ 2名は、性別、年齢不明。

Ⅲ-1. 相談実績

⑥ 居住別(42件中)

居住地別では、市内が約70%である。

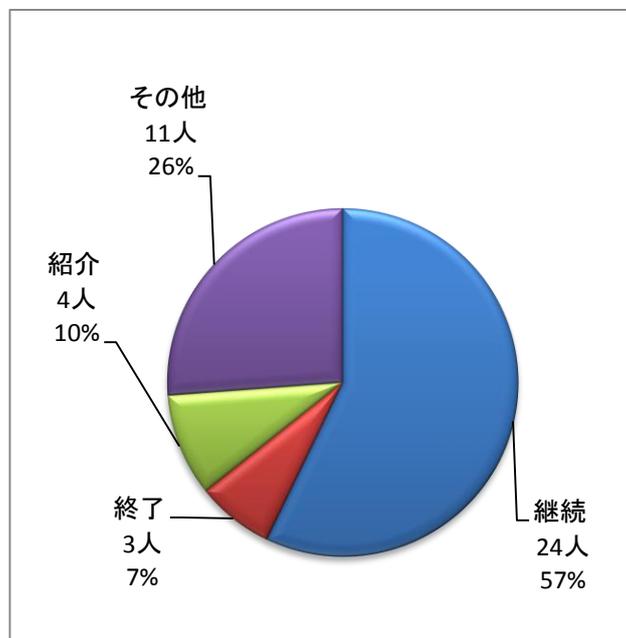
市内	28	67%
市外	10	24%
不明	4	9%
合計	42	



⑦ 相談結果(42件中)

相談を継続するものが57%、紹介が10%、終了が7%である。

継続	24	57%
終了	3	7%
紹介	4	10%
その他	11	26%
合計	42	



終了

- ・就労(2)
- ・その他(1)

紹介

- ・保健所(1)
- ・南紀若者サポートステーション(1)
- ・福祉課(2)

その他

3ヶ月未満の継続

- ・関係者からの相談(2)
- ・家族・本人からの相談(1)

1回のみで終了

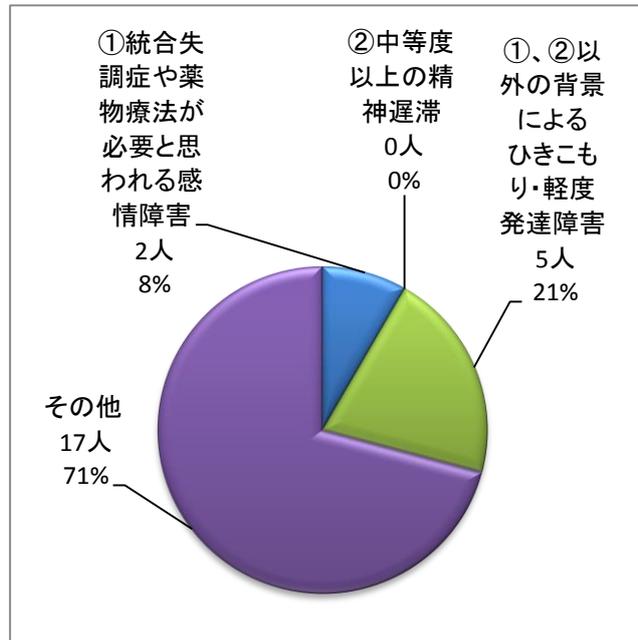
- ・本人から相談(2)
- ・家族からの相談(4)
- ・家族・本人からの相談(1)
- ・友人からの相談(1)

(3) 相談継続について

① 継続分類(24件中)

その他は、他の背景がないひきこもりの方で、約70%である。

①統合失調症や薬物療法が必要と思われる感情障害	2
②中等度以上の精神遅滞	0
①、②以外の背景によるひきこもり・軽度発達障害	5
その他	17
合計	24

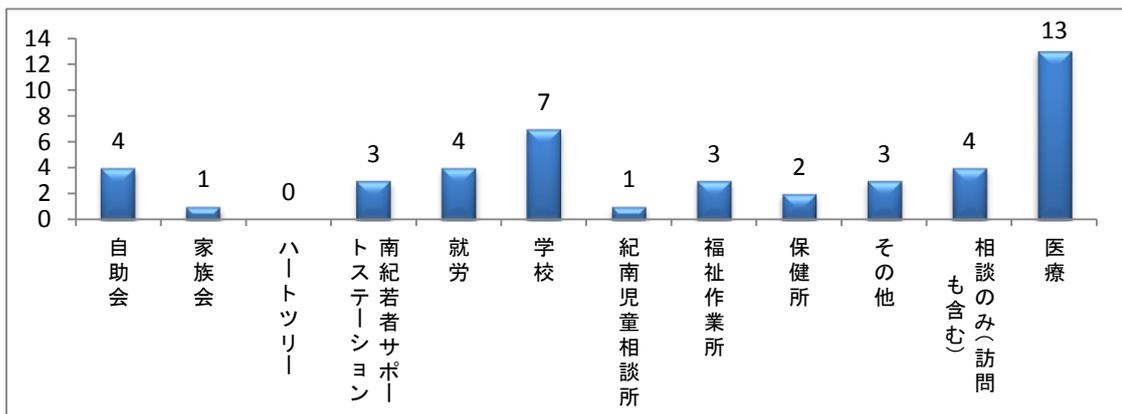


② 継続状況(重複あり)

継続状況は、学校に在籍している人が7人と多い。

自 助 会	4
家 族 会	1
ハートツリー	0
南紀若者サポートステーション	3
就 労	4
学 校	7
紀南児童相談所	1
福祉作業所	3
保 健 所	2
そ の 他	3
相談のみ(訪問も含む)	4
医 療	13

- ※ 相談のみ(訪問も含む)は、
自助会や他の支援を利用していない方。
- ※ 相談のみ(訪問も含む)は、
医療と重複している場合もある。

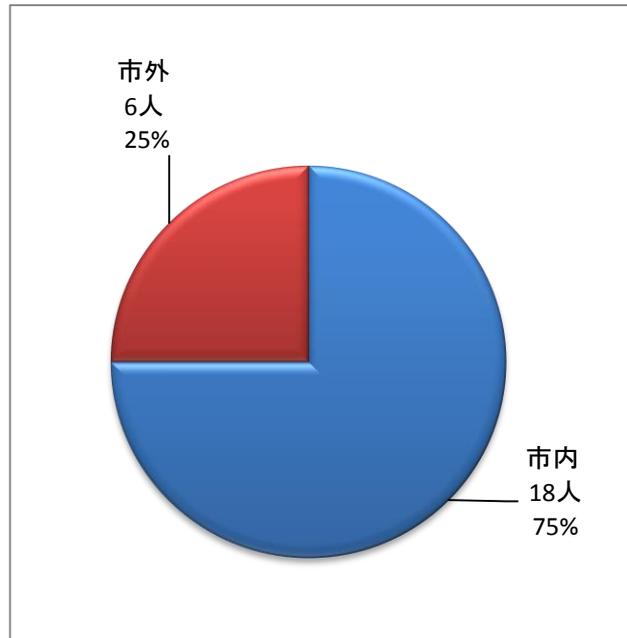


Ⅲ-1. 相談実績

③ 継続居住別(24件中)

市内は75%、市外は25%である。

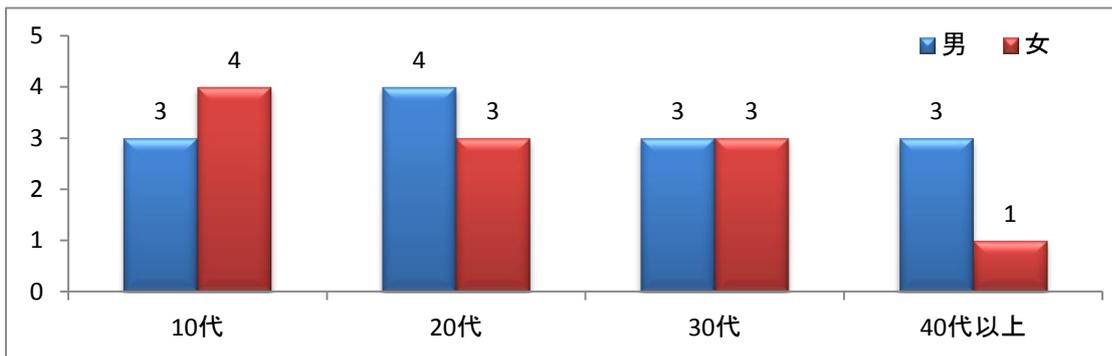
市内	18	75%
市外	6	25%
合計	24	



④ 継続年代別男女別件数(24件中)

年代別で見ると、男性は20代が、女性は10代が一番多い。

	10代	20代	30代	40代以上	合計
男	3	4	3	3	13
女	4	3	3	1	11
合計	7	7	6	4	24



Ⅲ-2. 支援の報告

(1) 家族会

ほっこり会(紀南地方ひきこもり家族の会)実績

実施日	内 容	出 席 者				実 数	参加家族数	対象家族数
		父	母	その他関係者	窓 口			
H 26. 4. 8	話 合 い	0	3	0	2	5	3	4
H 26. 5. 13	話 合 い	0	2	2	2	6	2	
H 26. 6. 10	話 合 い	0	3	0	2	5	3	
H 26. 7. 8	話 合 い	0	2	0	2	4	2	
H 26. 9. 9	話 合 い	0	3	2	2	7	3	
H 26. 10. 14	話 合 い	0	1	1	2	4	1	
H 26. 11. 11	話 合 い	0	4	2	2	8	4	
H 27. 12. 9	話 合 い	0	3	1	2	6	3	
H 27. 1. 13	話 合 い	0	3	2	2	7	3	
H 27. 2. 10	話 合 い	0	3	2	2	7	3	
H 27. 3. 10	アロマ体験	0	2	2	2	6	2	
	平均	0	3	1.3	2	5.9	2.6	

(2) 青年自助会実績(月2回の集まり)

実施日	内 容	出 席 者	窓 口	実施日	内 容	出 席 者	窓 口
H 26. 4. 4	話 合 い	1	2	H 26. 10. 3	ジグソーパズル作り	1	2
H 26. 5. 16	ジグソーパズル作り	1	2	H 26. 10. 17	話 合 い	1	2
H 26. 6. 20	ジグソーパズル作り	1	2	H 26. 11. 7	ジグソーパズル作り	2	2
H 26. 7. 18	ゲ ー ム	1	2	H 26. 12. 5	話 合 い	1	2
H 26. 9. 26	ゲ ー ム	2	2	H 26. 12. 19	茶 話 会	3	2
				H 27. 1. 15	ジグソーパズル作り	1	2
				H 27. 2. 6	フ リ ー タイ ム	1	2
				H 27. 3. 6	話 合 い	1	2
				H 27. 3. 20	ジグソーパズル作り	2	2

Ⅲ-2. 支援の報告

(3) 啓発活動・視察・問い合わせ

○ 啓発活動

日付	内容	人数
H 26. 7. 30	田辺市養護教諭研究会 研修会	6名
H 26. 8. 18	南紀高等学校教育対策委員会研修会	50名
H 26. 8. 22	中部地区民生委員 研修会	20名

○ 視察

H 26. 7. 3	放送大学 大学院生	1名
H 26. 8. 19	盛岡市議会議員・奥州市議会議員・北上市議会議員	3名
H 26. 11. 6	山口市議会 市民クラブ	2名

○ 問い合わせ

NHK和歌山放送局	兵庫県豊岡市
山形県会議員	橋本市役所

(4) ひきこもり支援啓発講演会

- 主 催 : 田辺市ひきこもり検討委員会/田辺市/田辺市福祉委員連絡会
田辺市社会福祉協議会/和歌山県子ども・若者支援地域協議会
- 共 催 : 若者サポートステーションWith You南紀/田辺市ボランティア連絡協議会
- 後 援 : 田辺市教育委員会/田辺保健所/社会参加支援センターハートツリー
(公社)白浜・田辺青年会議所/和歌山県精神医学ソーシャルワーカー協会
朝日新聞和歌山総局/毎日新聞和歌山支局/読売新聞和歌山支局
紀伊民報社/NHK和歌山放送局/(株)テレビ和歌山和歌山本社
(株)和歌山放送/産経新聞社
- 日 時 : 平成 26 年 9 月 20 日(土) 13:00~16:20
- 第一部 : 創作劇 : 「クラスメイト夢太郎」(劇団ムゲンノカノウセイ)
- 第二部 : 演 題 : 「ひきこもり支援から見た地域福祉の可能性」
~ひきこもり者の力を地域づくりへ~
- 講 師 : 秋田県藤里町社会福祉協議会 菊池 まゆみ 氏
- 参加者 : 352 名(ひきこもり検討委員・関係者・事務局含む)



【講演内容】

ひきこもりだったと言うのは辛いこと、同級会には行きたくない。けれど、テレビには、実名で出ようとする。テレビや新聞は OK と言う。同級生から電話がくると、「そうなんだよ」と答える。家に居る事で、自ら発信する機会がなくなって、だんだんひきこもるようになる。ひきこもりのイメージがあると思うが、可能性を秘めた若者たちという目で見ると有難い。

今日の話は、「こみっと」の話になる。事業の正式名称は「ひきこもり者及び長期不就労者及び在宅障害者等支援事業」。「こみっと」の支援、登録生の話を中心としたい。「こみっと」の翌年には、宿泊棟「くまげら館」を開設している。

ひきこもり支援は、専門家に任せる、福祉がいたずらに出来ることではないと思っていた。でも違った。例えば、風邪をひいた時に、医師でないと治療や投薬ができない。でも、汗をかいて気持ちが悪いので着替えを手伝う、食欲がない時に食べやすいものを提供する、そういったことなら福祉でもできる。福祉でないとできないことを頑張ってみようと思った。

原因探しはしない。何の原因で今家に居るのか、そういったことは治療やカウンセリングが必要な場合もあるので、専門家に任せる。福祉は、地域の中で快適に暮らすという視点でみる。関わっている方の中で、カウンセリングや医師の治療を希望する場合は、そちらを利用してもらう。私達は、カウンセラーではないという姿勢でやっている。ひきこもったのは、親のせいという方もいるし、意外と何となくずるずると家に居てしまっただけというケースもある。原因を自ら言って歩く人も。「こみっと」に来だして2、3年目になった時、「あの頃は若かったからさ」などと言い、知らない間に自分で乗り越えている方もいる。そういった方々を、横から支えている。

国が示している平成 27 年度から開始予定の生活困窮者支援事業と「こみっと」はとても似ている。藤里町では、平成 18 年度から取組を開始している。

Ⅲ-2. 支援の報告

福祉というのは、知らない間に弱い人を決めないと支援できないと考えてしまう。高齢者、障害者、一人暮らしなどが対象と考え対象者を決めてから支援を行いがちである。しかし、地域に住む人はそれだけではない。支援している人が、明日は支援される側になることもある。また、一人暮らしの人すべてに支援が必要なわけではない。一人暮らしは、家族がいない分、自由に動ける人。また、ひきこもりだったことで、病気があり、治療が必要でも、毎日何らかの支援がいるわけではない。彼等の力が、地域の力にならないか。弱者を決めず、生活困窮者に陥る前に何か出来ないか。国の生活困窮者支援法に、注目している。

市町村社協の使命・経営理念としては、4点あげられる。中でも、「地域の福祉ニーズに基づく先駆的な取り組みへのたゆみない挑戦」これをしなさいといわれるところが、社協。

ひきこもり対策事業がすでに十分足りているなら参入の必要はない。でも、まだまだこれからという部分があるなら、社会福祉法人が参入すべきという思いでやっている。

原点は秋田県のネットワーク活動事業。一人の不幸も見逃さない運動がいつの間にか、一人暮らし老人対策事業になってしまった。改めて原点に戻りたいと思っている。

平成 17 年度から、「福祉でまちづくり」を合言葉にした、地域福祉トータルケア推進事業を開始した。5つの重点事業があるが、その中で、「次世代の担い手づくり」が「こみっと」のひきこもり支援につながっている。

福祉のニーズを持つ人というのは、支援を受ける人達だが、同時に支援できる側にもなれる。65歳以上の人は年齢で、高齢者と呼ばれる。確かに若い頃より辛くなっていることはあると思うが、支援できる側になれることもある。今日は、支援される側、明日は支援する側にと考えれば、皆社会参加ができる。

[情報は、大切に、きちんと回答する]

民生委員や福祉委員から、「あそこにヘルパーが入った方がいいよ」という情報が入って、そこから介入しようとするが、なかなか思うように進まず、1~2か月経ってようやくサービスが開始されるということがある。その頃には、情報を最初にくれた人のことはすっかり忘れてしまっていて、最初に情報をくれた方から、「どうして連絡をくれなかったのだ」と言われることがあり、申し訳なかったということもあった。つないで、つないで、やっと2か月後となると、その間に担当者が変わっていてという現状もあった。いただいた情報に対して、きちんと返さないと失礼だと考えた。

それに答えるために、平成 17 年度から報告・連絡・相談用紙を活用し、色んな人が苦情や相談を書いて出すようになった。提出される件数は、年々増えている。色んな情報が集まるので、それを元に何をしなければならぬかを考える。当初は、承ったことに対して、出来なかったという報告が多かった。せつかくいただいた情報だけれど、「介入することができなかった」「介入が時期尚早だった」等きちんと相手に返すことを徹底して行った。そう答えると、怒られることもあるが、本気で考えてやろうとしていたのだと伝えると、色々情報をくれるようになった。そうすると、その情報を大切にしていますという姿勢が伝わって、喜んでくれる人がでてきた。

[ニーズをとらえるアンテナができてきた]

ヘルパーが、祖父母の介護に行くと、そこのお嫁さんから「うちの息子がぶらぶらして仕事をしていない」という愚痴をよく聞かされた。それまでの日報には、祖父母の記録は書くところがあったが、そういった家族の状況を書くところがなかった。そこで、この用紙に3行以上書きたい事を書いてもいいと決めると、「介護者が、家にいる息子が心配という話を30分していた」などと書くようになった。これまでの社協の職員は、その話を聞いても、それは「愚痴を聞いてあげた」という感覚で、自分の仕事とは捉えてなかった。知

らない間に、住民の声を聞けなくなっていたのだ。

[地域のニーズからこみっとの活動は生まれた]

平成 17 年度から、60 歳以上を対象に、「介護予防・元気の源さんクラブ」を週に一回開始した。当初、男性の参加はほとんどなかった。地域の老人クラブを回って、どうやったら出て来てくれるかを聞いた。すると、「公民館まで出張してくれれば出てやるぞ」と言われた。「それなら、行くよ」と出向くようにした。社協が来るのだったらと出て来てくれる人が増えた。参加者からは、老人クラブで対話する楽しみが増えたという声が聞かれるようになった。

そのうち、「社協は老人のためばかりしていないか、若い世代からやってくれれば」という声があがった。ひきこもりや障害をもつ人、若い人の居場所が必要ではないかと言われた。ひきこもりの人に「外へ出ておいでよ」と声をかけても、藤里町のどこに行くところがあるのかと。

それまで、居場所づくりは、高齢者しか考えていなかった。そこで、「こだわりの縁側事業」の検討を始め、うちの町にどれくらい来てくれる人がいるのか、何人かで調べてみた。すると、100 人を超える人がひきこもっていた。若い人がほとんどいない町のため、かなりショックな数字だった。

[ひきこもりは誰にでも起こり得ること]

特別な人がひきこもっているのかと思ったら、彼等は普通の若者だった。高校を卒業し、秋田市や東京など都会に出ていく、そして、仕事が合わないと辞めて帰ってくる。藤里町には就職先がないし、近隣でも不況でなかなか仕事は見つからない。就職試験に 5 回落ちると、ちょっと休もうと思うらしい。父母と同居しているし、少しの間ならと思う。ちょっと休もうと休み始めるとやり直すのが大変。ちょっとが、あつという間に半年から数年に。そうなると、就職していないから、友達と飲み歩くのも格好悪い。せいぜい、3 か月から 6 か月ならいいが。いい所に就職できたら、友達と飲み歩いてもいい。家に居るのは、みっともない、近所の人目もある。就職できたら、胸を張って歩きたい。そのうち、どんどん行動範囲が狭くなる。普通の若者でも起こりうること。社会復帰する機会がない。もう一度、社会復帰するきっかけを作れたらという思いから支援を始めた。

[支援者が考える支援と利用者が望む支援は違う]

レクリエーションもしていたが、そういうことをしたいと望む若者はいなかった。みんな、社会復帰を望んでいた。高齢者はどんどん高齢になればなるほど、自分の体力が落ちて行きたくない。一方的に介護を受けるのは恥ずかしい。例えば、ちぎり絵が得意な人はクラブの指導者になってもらった。参加者が皆いきいきとしてきた。居場所だけではなく、そこに役割がなければいけない。

[人をまきこむ地域づくり]

総合相談・生活支援システムの構築として、総合相談体制の整備を色んな公的な補助金を取りながら展開した。福祉でまちづくりを考え、商店街をまるごとサロンに。商店街とタイアップして。例えば、お買いものツアー事業。高齢者のお買い物に若い人（「こみっと」の登録生）と一緒にいく。そうすると、沢山の重たい荷物を若い人が持ってくれる。

「ひきこもりってどんな人ですか」といつも情報をくれる民生委員に聞くと、「うちの地区にはいない」ときっぱり言われた。本人や家族が隠しているのに、それを無理やり密告のようなことをすると失礼、また本人や家族が違うと言っているならそういうふうに見なけれ

Ⅲ-2. 支援の報告

ばということもあった。

親が、ご飯と一緒に食べないことをひきこもりとは思っていないケースも。親の中には、無理に引き出す必要はないと考えている人もいた。ひきこもりという言葉が余程イメージを悪くしているようだった。

[事業報告の大切さ、評価なくして進化しない]

「ひきこもり町おこしに発つ」という本を出版して、色んな若い人が声をかけてくれるようになった。自分も一歩間違えるとそうになっていたかもと、自分のことのように感じている若者が多い。

高齢者は、ひきこもるような、みっともない奴は都会の話で、ここ(藤里町)には居ないと思っていた。高齢者は、「真面目にさえ生きていれば」が通用した世代。何回も面接を落ちてへこむということが、高齢者には分からない。仕事をしていないのは働く気がないと思っている。「真面目にだけでは」が通用しない若者たちの切羽詰まった辛さが分からない。老人クラブの人は、福祉への理解はある。ひきこもり支援イコール怠け者の支援という考えの人もいたが、社協がやるのだったら、出来る事を一緒に探そうというところから始まった。

[地域のか]

「こみっと」登録生の活動は、段階的にステップアップできたらいいなと思っていた。しかし、実際には、こちらの予想に反し、いろんな形に展開していった。

お食事処「こみっと」では、そば打ちに挑戦した。もっと色々できることはないかを考えて、白神まいたけキッシュを作り、そこで就労を考えた。

「こみっと」バンクとして、地域の仕事に行ってもらうようにした。シルバーバンクの人と一緒に、雪かきや煙突のすすはらいなどに行く。一度経験し、喜ばれる言葉をかけられると、役に立つ実感がわき、仕事はきつい、次も嫌がらずに行くようになった。

福祉の支援を受けるということは、若者には屈辱的で、社協の用意した仕事に行くのは嫌だけど、地域の方の役に立つ仕事なら喜んで行く。こうして、地域の方とのふれあいが増え、ここから求職者支援事業に発展した。

社協は、ひきこもりの方を無理やりひき出すために歩いているわけではなく、ひたすら情報提供(「こみっと」通信等)を続けている。その情報提供が、一歩踏み出すきっかけになる。

[相談支援とは何か]

求職者支援事業は、なるべく年2回くらい実施するようにしている。伴走型支援の効果をあげているが、実績として何人就職したかという、実績にならない人もいる。

本人が「ハローワークに行かない」と言い、「明日行くつもり」、「来週行くつもり」との言い方をして、それを聞いた職員が「来週行くそうです」と社協へ帰ってくる。けれど、行かずにそのまま、ズルズルということがあった。行く勇気がくじけるとためなので、本人が「行きたい」と言えば、「今日、今一緒に行こう」と言ってごらんとすすめ、一緒に行ってもらった。そうすると、かなりほっとした顔をする。行きたいけど、行かなければと思うけれども、行けないでいる、だから、「一緒に行こう」と即実行に移す。

その道中、アドバイスをしている。ハローワークでは、必ず履歴書の空白期間を聞かれるので、それにどう答えるか、彼等はかなり真剣に悩んでいる。嘘をつくのはいけないが、自分の一番痛いところをわざわざ曝け出す必要はない。伏し目がちにして、尋ねられたら、低いぼそぼそした声で、「いろいろ」と答えるようにアドバイス。それで、世の中通ることもある。そこで、「はっ？何をしていたのですか」とつつこむ人がいても、無視していい

よと伝えている。彼等は、経験が少ないから曝け出さないと生きていけないと思っているが、大人は、そんなに残酷じゃない。「いろいろ」で通ることもある。何かあるのだろうなと勝手に解釈してくれることもあると。

求職者支援事業を受けたいからと一緒にハローワークに行って、貼り出している求人票を見て、試しに受けて就職できた方も結構いた。ハローワークに行く勇気がなかった、行けずにいた、ただそれを一緒に行っただけで就職できた人も何人もいる。

でも、家族ではだめだった。第三者だったら、社協の職員の話なら聞けても、家族の言うことは聞けない。たかが、ハローワークでどうするこうすると悩んでいる、履歴書の書き方がよくわからない、笑顔で面接を受けることも教えてもらってない。今の若い人たちは、学校で、面接の受け方を習っているが、ある程度の年齢以上の人は習ったことがない。そこを支援するだけで就職につながる人もいる。

[関わりから確実に変化が見られる]

「こみっと」開設の一年前から、「ひきこもり者及び長期不就労者及び在宅障害者等支援事業をするので、その時になったらお誘いにあがるので」ということを伝えるために、説明会などを開き、老人クラブなどいろんなところへの宣伝を繰り返した。そして、「こみっと」開設の時に、訪問して回った。そうすると、社協に来られたことがかなり若い人にはショックだったようで、社協の職員は、「なまはげが来たー！」というような状態で見られた。

一回目訪問した時には、本人が留守で、一週間後に再度訪問すると母に涙ながらに感謝されたケースもある。「ありがとうございます。社協に来られたのがよっぽどショックだったようで、青くなって、自分で就活し、御蔭さまで就職できたのです」と言っていた。ひきこもりだったかはよくわからないが、就職できず、2、3年家で過ごした方でも、ほんの少しのきっかけで自分で就職や世の中へ出ていく人も結構いる。

ひきこもり期間が長くなると、お金もなくなり、出ていく場が減り、身なりがどんどんひどくなる。靴下を全くはかない人がいて、ヘルパーの養成研修に行くのに「靴下くらいはいたら」と人の家に行くのに靴下がないと失礼にあたることもあると声をかけた人もいる。その方は、今になって、「あの時は、靴下を買うお金がなかった」と話す。その時は、「裸足が好きなのです。ポリシーだから口出さないでください」と言っていたが。

色んなケースがある。彼等は、同情がほしい訳ではない。自分の中で処理しながら生きていく方なので、そこをわざわざほじくってどうするこうするという話ではない。

ひきこもっていた弊害は、見た目以上に大変。本人が、了承しているので紹介するが、どこからどうみても普通の人で、逆に私がひきこもり扱いしていると他の人から怒られるくらいきちんとした人がいた。その方が、「こみっと」に通って三年目で、町外研修に行き、ハンバーガーショップに寄った。肌寒い日に、汗が噴き出して「初めてで、注文の仕方が分からない」と言う。店員さんに、きれいなお姉さん達がいて緊張もする。周りの人と同じように言えとあって、注文し、バスへ戻ったら、おおはしゃぎ。「初マックに行ったぞ」と言い、みんなに「馬鹿かお前」と言われたが、よっぽどうれしかった様子。

ひきこもり期間があるということは、見た目以上に色んな社会経験が抜けている。その負い目を少しずつ訓練しながらやっている。そうやって、「俺初めてなのだ」と言えるようになっていく、言える仲間がいる、それも大切なことだと思う。

昼夜逆転からの支援も大変な作業。最初に「こみっと」登録生として来ると有難いが、最初に求職者支援事業を受けに来て、昼夜逆転だと大変である。

ヘルパー養成だと一科目でも落とすと修了証書が出せない。求職者支援事業だと、休みすぎると登録抹消になることもあり、休みや遅刻は原則認められない。本人が受けたいと言えば、何とか受けさせたいと頑張っている。担当から、前日電話して、「明日だよ、頑張って寝て明日、起きるのだよ」と声かけし、当日「あと一時間で始まるよ、起きてい

る？起きなさい」と電話しても埒が明かず、家まで起こしにいくというような、3、4日つきっきりの人も中にはいる。

そういう人は、毎回求職者支援事業を受ける15人程のうち1～2人。そういう期間があっても、3日から一週間で普通に戻る。それまでも何度か就職したいと思う時があって、昼夜逆転を直さないといけないと思い、朝起きて散歩などしても続かずだったが、求職者支援事業を受けるという強い気持ち、行く所があれば違う。

一週間経つと、私共の世話を受けたなんて、きれいさっぱり忘れていたような人もいる。最初に出てきた時は、社協さんの顔を立てるために受けてやっている、就職する気はないが、社協に恥をかかせたら可哀想だから来てやったと言う人もいる。

そして、同じ受講生の方々、おばさん達のパワーがすごい。一緒の受講生達は、誰がひきこもりだったのかは知らない。おばさん達に、「あんた若いのだからリーダーになりなさい」「あんた若いのだからこの紙に書きなさい」と指示され、「髪を撫でておいで」「髭を剃っておいで」と言ってもらっている。卒業する頃には、どこを受けようかと情報を見て、周りがどんどん就職に向け走り始めると自分も受けたくなくて、ほとんどの人が求職者支援事業を修了する頃には、本気で就職活動をしている。「俺は、長髪が好きなのだから文句を言わないでほしい」と言っていた方も3か月後には、きれいに短髪にして髪を撫でて面接に行かれたし、他の人も自ら髪をきれいに整えてという方が多い。求職者支援事業は、とてもおもしろい事業になっている。

とはいえ、求職者支援事業の指定を取るのには難しく、就職率が8～9割以上ないと認められないといわれる。就職する気のない人に事業を受けさせるのはいかがなものかと言われている。ひきこもりの人は最初、本当に就職したいか自分でもわからない、というよりも就職したいと胸を張って言えない状態。嘸いて就職する気がないと言う人も多い。国や県は、そういう人のための事業ではないと言う。現に、ひきこもり中心の事業になっているので、事業修了後、あと2、3か月居てほしいということで、「こみっと」に登録してもらって、2～3か月経過してからまた就職ということもしているが、求職者支援事業が終わった時点ですぐ就職しないと数字に換算してもらえないので、やりとりしながらやっている。福祉の世話ではなく、ハードルは高いけども、ハローワーク経由の求職者支援事業の方を受けたいという若い人がいる。

[地域の方の集える場に]

「こみっと」の一階に共同事務所を置いている。社協の事務所ではなく、老人クラブ、NPO 法人、ボランティアなどの団体に登録してもらい、共同事務所としている。2階の会議室は、無料で貸し出している。とにもかくにも、「こみっと」に町の色んな人が出入りする場になっている。

家から出てくるけれども、匿名性のない小さな町では「こみっと」に通っているだけで、あの人ひきこもりだったんだと町の人から見ればわかる。父母は、家から出ると、社協が地域の好奇の目から守ってくれると思っていたようだが、守り切れないのは最初から分かっていた。

家から出る勇気が出て、「こみっと」の中で仲間と触れ合い固まって、居心地が良い場所になると、そこからまた地域に出るのは勇気がいるので、家から出た最初にまず、地域の方と触れ合う体制にした方がいいのではと思い共同事務所をつくった。

そこには、地域の主だった方、口うるさい方がよく来て、本人たちと自然に触れ合っている。当初、本人たちは、地域の色んな人が居るのを嫌がると思っていた。嫌だったら、控室とかにいればいいし、共同事務所は色んな人が出入りする場所だという話をしていた。ひきこもりが長ければ長いほど、社会に出た経験がないので、職員と地域の人との区別がほとんどつかず、父母は気にしていたが、ご本人たちはほとんど気にせず溶け込んでいた。

例えば、老人クラブの人は、総会の資料を作り、共同事務所に来る。けれど、印刷機が使えない、手書きしかできない。それを「こみっと」登録生が手伝っている。資料を印刷したり、パソコンで打ったりしている。そうすると、色んなことが起きている。

よく出入りするボランティアさんが、「(登録生に)私が色んな事をしてあげたいのに何もやらせてくれない」と怒っている。ボランティアさんは、例えば、鼻を垂らしている人がいれば鼻をふく、髪を整えてあげるなどのお世話をしたいみたいだ。「お世話が必要な人はいないから」と説明しているが、ボランティアした感がないのだと思う。

けれど、みんなもっとすごいことをしてくれている。毎日会って、「がんばれ」という声かけももちろん、登録生が家に帰った時、散歩などしようとする時最初の頃は髪や髭が伸びている方もいて、不審者情報となる。それを「こみっと」に来ている老人クラブやボランティア、民生委員が「あの人は、こみっとの人だから心配ないの」と言ってくれる。そうすると、不審者情報が、「がんばってね」というかけ声になっていく。「こみっと」の近辺だけでなく、地域の中で応援する人が増えていくという現象が起きている。

「こみっと」支援に賛成ではなかった老人クラブや高齢者が、毎日「こみっと」で見ている真面目で一生懸命な若者を「常務、彼らを応援してやりなさいよ」と言われる。「えーつと、私、だからひきこもり支援という事業をやるうとしておまして・・・」と説明すると、「馬鹿者、お前はあんな真面目な一生懸命な若者をひきこもり扱いするのか」と怒られる。言葉で理解しようとするのは難しいようで、ひきこもり支援事業という言葉にはアレルギーがあるようだが、一生懸命応援しようとしてくれている。お互いの存在を知る機会があることは、とても大切だと勝手に解釈してやっている。

[地域おこし・商品開発]

「こみっと」感謝祭は、共同事務所と「こみっと」登録生の共同事業としてやっている。若者は、手打ち蕎麦もかなり上手になった。

「こみっと」の登録生には、私が、講演活動に走っているのではなく、白神まいたけキッシュの行商に歩いているということになっている。「何のためにそこまで行って来たのですか」と言われる悲しい現実もあるので、買っていただけると有難い。初年度、白神まいたけキッシュは、450万円売り上げた。すると、町の人々の彼らを見る目が変わってきた。お金って大事。それまでのお荷物のひきこもり、かわいそうなひきこもり支援という視点から、埋もれていた若者を出して高齢化のすすむ町で若者が頑張れば、色んなことができるという見方をしてくれるようになっていく。結果を出すということはそういうことかと思いつている。白神まいたけキッシュは一見スイーツに見えるが、ワインやビールに合う。一番初めに、ボランティアさんが試食で食べて甘くないと怒ったので、お惣菜みたいなものだと説明すると、今度は「ご飯のおかずにしたらずかつた」と言われた。説明するのは、結構大変だった。甘くないことを覚えておいていただければと思う。

「こみっとバンク」で地域に出て、シルバーバンクとともに仕事をしている。シルバーさんは、定年退職年齢が上がり、活動的な人達が減っているのが現状。経験年数はあるが、畑の草取りなどを頼まれると、どのくらい大変かを知っているのが嫌がる。けれど、「こみっとバンク」の若者と一緒になると喜んでしてくれる。さすが、シルバーさん、口で「お前ここやれ」とも言えるし、辛いことを若者と一緒に行いたいという気持ちもある。若者たちも、地域に顔の利く人がそばにいて、「この若い者をよろしく頼むわ」と言って歩いてくれると、有難いし嬉しい様子。現在、「こみっと」登録生は30名。「こみっと」バンクへの依頼も多くなっており、毎日どこかへ行っている。嬉しいのだが、依頼が多い状態で、そばを打つ人がいなくなって、職員がそば打ちをするようになっていく。

このように、「こみっと」支援の効果としては、福祉でまちづくりを目指した社協の取り組みの一貫として、色んな効果が表れている。

【地域の力を産み出す】

生活困窮者支援事業が実際に始まる時になって、その対象者が狭められなければよいと思う。藤里町社協ではあえて生活困窮者ではなく、生活困難者として、ちょっとした支援で可能性をもった人達ですよ、というのを出したくて藤里町独自の社会復帰訓練カリキュラムを作成し、平成 25 年度から頑張っている。根っこにあるのが、ふれあいマップや「こみっと」バンクの活動。

求職者支援事業のヘルパー2級養成講座では、普通に講義をして、実際に車いすの使い方を演習して、それが出来たら実習へというカリキュラムを組んでいる。「こみっと」バンクは草取りをと依頼を受けたら、「はい」とただ派遣していた。しかし、バンクとして駆り出されるなら、何をやっている事業所かわからずにただ派遣するのでは訓練にならないと思い、訓練カリキュラムに着手した。

講師は、すごい顔ぶれ。りんどう畑の農家さん、昨年度一番人気は葬儀屋さん、その他、居酒屋さん、床屋さんなど色んな人に講義をしてもらっている。例えば、葬儀屋さんは、大手の会社が出てきて小さい町では食べていける商売ではなくなっている。自分の代で終わり、息子に継がせても食べていけない。けれど、ふれあいを大事にする葬儀をしたいと希望する人もいる。自分の足腰が弱くなったらやめなくては、迷惑かけない内に辞めるタイミングを探さないと考えていた。彼女が、講義をすると、訓練生達が夢中にメモをとり、真面目に実習にも取り組んでくれた。「バイトに来るか」と聞くと「喜んで」と行くように。葬儀屋さんも若い人が応援してくれるなら、もっともっと頑張れるかもしれないと思ってくれた。これは、他の講師も言ってくれたこと。

つぶれそうな商店街で、これからいつまで続けられるんだろうと思っていた人達には、講師をしたことが一つの希望となり、期待感をもった様子。と、ここまでは、きれいな話だが、違う盛り上がりを見せている。

スキルアップを目指して訓練カリキュラムを実施した。第一回をした後、町で商店街の方から声をかけられた。「何で俺を呼ばなかったのか」「この次は俺だろ」と色んな声があり、意外な盛り上がりになった。

例えば、布団屋さんにはタオルの花輪などのアイデアがおもしろいのでそれを続けていくためにどうしたらいいかを話してと依頼したら、そんな話はずまらないと勝手に決めて、自分の半生、人生論を丁寧に講義してくれた。訓練生の方が大人で、大丈夫だったかと聞くと、「僕らを相手にきちんと自分の事を言ってくれるなんて嬉しかった」と感想を言っていた。

酒屋の若旦那さんは、ネットでお酒を売ろうとしていたので、それについて話をすると依頼したが、お食事処「こみっと」のメニューがつまらない、だから一緒に新メニューを開発しようと酒屋とは思えない講義をしてくれた。

今、地域の講師陣が違う盛り上がりを見せて、楽しい事業になりつつある。お互いに一緒に何かやろうとなっているので、今年度もこの社会復帰訓練カリキュラムに挑戦し粛々とやっている。

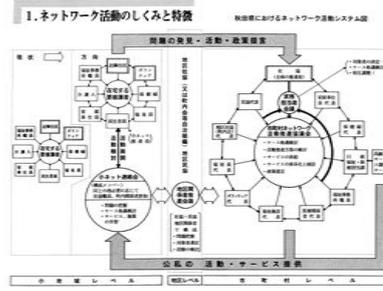


Ⅲ-2. 支援の報告

社協が？何故？ひきこもり対策事業を？
～市町村社協の使命・経営理念より～

- ①住民参加・協働による福祉社会の実現
- ②地域における利用者本位の福祉サービスの実現
- ③地域に根ざした総合的な支援体制の実現
- ④地域の福祉ニーズに基づく先駆的な取り組みへのたゆみない挑戦

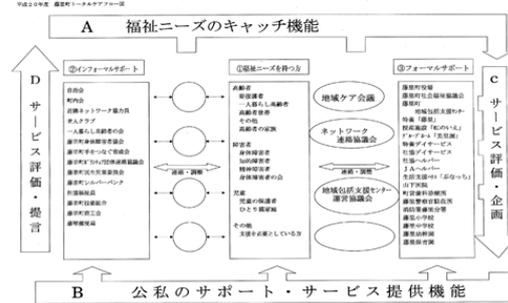
原点は秋田県のネットワーク活動事業
～昭和55年から始まり32年が経過～



「福祉でまちづくり」を合言葉にした
地域福祉トータルケア推進事業の開始
平成17年度より

- 1) 総合相談・生活支援システムの構築
- 2) 福祉を支える人づくり
- 3) 介護予防の為に健康づくり・生きがいづくり
- 4) 福祉による地域活性化⇒「福祉でまちづくり」
- 5) 次世代の担い手づくり

藤里町トータルケアのフロー図



1) 総合相談・生活支援システムの構築②
～報告・連絡・相談用紙の活用～

1) 総合相談・生活支援システムの構築

・苦情・相談等受付件数の推移

平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年
197件	1,031件	1,933件	2,833件	6,244件	5,318件	18,038件	

3) 介護予防・元気の源さんクラブ事業
～「源さんクラブ」事業の展開～

平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
60歳以上週1回開催	60歳以上週1回開催	60歳以上週1回開催	60歳以上週1回開催	60歳以上週1回開催	60歳以上週1回開催	60歳以上週1回開催
	出張・源さんクラブ	出張・源さんクラブ	出張・源さんクラブ	出張・源さんクラブ	出張・源さんクラブ	出張・源さんクラブ
		みんなの縁側事業 介護者対象 月1回開催	みんなの縁側事業 介護者対象 月1回開催	みんなの縁側事業 介護者対象 月1回開催	みんなの縁側事業 介護者対象 月1回開催	みんなの縁側事業 介護者対象 月1回開催
	「こだわりの縁側」 事業の検討	「こだわりの縁側」 事業の検討		「こみっと」 開設	「くまげら」 開設	

1) 総合相談・生活支援システムの構築
～総合相談体制整備～

平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年
地域包括支援センター受託準備	地域包括支援センター受託開始	地域包括支援センター受託運営	地域包括支援センター受託運営	地域包括支援センター受託運営	地域包括支援センター受託運営	地域包括支援センター受託運営
			地域包括支援センター受託の検討	地域包括支援センター受託開始	地域包括支援センター受託運営	地域包括支援センター受託運営
	指定相談支援事業所の開設	指定相談支援事業所の運営	指定相談支援事業所の運営	指定相談支援事業所の運営	福祉の拠点「こみっと」開設	宿泊棟「くまげら」開設

4) 福祉で町づくり



『ひきこもり』ってどんな人ですか？

- 「ひきこもり」は言い切れる高齢者
- 自分もひきこもりだったと言い出す若者



- 現代の若者の生きづらさを感じるのです

「こみっと」登録生としての活動

- 1) 週1回のレクリエーション活動
⇒現在では参加者は殆どゼロ
- 2) 「こみっと」共同事務所でのパソコン等操作訓練
⇒現在では参加者は殆どゼロ
- 3) お食事処「こみっと」での就労訓練
- 4) 白神まいたけキッシュでの就労
- 5) 「こみっと」バンクとしての地域での活動

「こみっと」の取り組み① 了解を得た「生活困難者」の方々への情

- 「こみっと」通信の配達
- 「こみっと」の各事業への誘い
⇒「こみっと」感謝祭
- 「求職者支援事業」への誘い
- その他

伴走型支援の効果

- ハローワークでの手続き等の支援
- 昼夜逆転からの支援
- 求職者支援事業終了後の支援
⇒「こみっと」登録生としての支援開始

求職者支援事業の成果

	受講者数	就職者数	こみっと登録者数
平成22年 (6ヶ月)	15人 ★(7人)	12人 80% ★(5人)	3人 ★(2人)
平成23年 (6ヶ月)	15人 ★(13人)	10人 66% ★(9人)	5人 ★(5人)
平成24年 (4ヶ月)	15人 ★(9人)	11人 73% ★(8人)	1人 ★(1人)
平成24年 (4ヶ月)	12人 ★(11人)	8人 72% ★(8人)	3人 ★(2人)
平成25年 (3ヶ月)	9人 ★(8人)	9人 100% ★(8人)	0人 ★(0人)

★：家庭訪問の情報により受講に至った方の人数

共同事務所と「こみっと」感謝祭



お食事処『こみっと』



白神まいたけキッシュ



白神まいたけキッシュの販売



こみっとバンクの活動



「こみっと」支援の特徴

- ・居場所づくり・活動の場づくり
- ・自分に出来る形での参加
- ・支援する者・される者の区別をつけない
⇒ 共同事務所、シルバーバンクとの連携等
- ・選択・自己決定の為の体験の場づくり
⇒ 選択肢があって初めて自己決定できるの

「こみっと」支援の効果

- ・「こみっと」登録制の明るさ・積極性
⇒ 地域住民との交流の場が増えるほどに理解者・支援者が増えていくという現象
- ・一般就労率の高さ
⇒ 実態把握調査の効用含む
- ・地域福祉活動への貢献
- ・地域活性化への貢献

そして、「生活困難者の力を地づくりに活かす事業」へ

- ・藤里町社協独自の社会復帰訓練カリキュ成と実施



- ・第1回 平成25年10月1日～平成25年12月27日
- ・第2回 平成26年 1月6日～平成26年3月28日

地域密着の葬儀についての講義 演習は祭壇設営



居酒屋で魚介類のさばき方・ 包丁の使い方



(5) 行政局講座(本宮地区)

- 1 . 参加者 30名(ひきこもり検討委員・事務局含む)
- 2 . 日時 平成26年8月5日(火) 19時~20時
- 3 . 場所 本宮行政局
- 4 . 内容 『ひきこもりの理解と支援について』
- 5 . 配布資料
 - レジюме
 - ひきこもり相談窓口 『ひきこもりの理解と支援について』
 - ひきこもり相談窓口 リーフレット
 - ひきこもり支援啓発講演会ビラ
 - 田辺保健所の精神保健福祉業務(抜粋)
 - ひきこもり者社会参加支援センターハートツリーについて
 - ハートツリー リーフレット
 - 南紀若者サポートステーション ビラ
 - 講演会ビラ
- 6 . 内 容

【民生児童委員協議会会長 あいさつ】

【ひきこもりの理解と支援について】

〔ひきこもり相談窓口〕

ひきこもりとは、2010年に厚労省から出された「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」に「様々な要因の結果として社会参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形での外出をしてもよい)」と示されています。簡単にまとめると、6か月以上社会参加していない、外出していても対人関係がない場合はひきこもりと考えるということになります。

ひきこもりの特徴としては、1970年代後半から増加している、全国では、数十万から百万人と推定される、どのような家庭のどのような子供にも起こりうる、しばしば著しい長期化(数年~十数年)に至る、長期化とともに精神症状が出現しやすい、長期化に至った事例が自力で社会参加を果たすことは著しく困難などがあげられます。

田辺市のひきこもりの支援についてご紹介します。田辺市では、市の窓口を中心として、様々な機関が支援に取り組んでいます。ひきこもり者社会参加支援センター「ハートツリー」は、居場所として通所でき、また相談や訪問、社会参加支援などを行っています。南紀若者サポートステーションでは、就労・就学支援、相談、訪問などを行っています。田辺保健所では、医師や精神保健福祉士、保健師などの相談や訪問などを行っています。また、精神症状などがある場合は、医療機関で診察やカウンセリングを受けたり、障害のある方の場合は「ゆめふる」で、相談などの支援を受けています。こういった様々な機関が、互いに連携し支援をしています。

また、市では、ひきこもりの支援について検討するため、年2回、会議を開催しています。検討委員会という全体の会議には行政局からも一名の方にご協力いただいております。また、年に10回実施している小委員会では、ひきこもり支援の課題に対して、どのように取り組むかなどを話合っています。

ひきこもりについて理解を深めてもらうことと、支援を広く市民の方に知っていただく機

会として、年に一回啓発講演会を開催しております。今年度は、二部構成で行います。一部では、田辺市の不登校の子どもさん達が通っている「ふれあいルーム」の方による劇、第二部では、秋田県藤里町社協の菊池先生をお迎えし、お話をうかがいます。藤里町の取組は、全国的にも注目を浴びており、町おこしなど参考になるお話が聞けると思っていますので、ぜひご参加いただければと思います。

続いて、田辺市の相談窓口の支援について、説明させていただきます。初回の相談は、電話・FAX・メール・来所でお受けしています。相談の多くは、ご家族からですが、ご本人から直接お電話をいただく場合もあります。電話相談が最も多いのですが、お話をうかがう中で、来所相談をお勧めし、一回で終わらないように、できるだけ継続できるように声をかけています。ご家族の方の相談の場合でも、できる限りご本人に接点をもてるようにして相談を継続する中で、自助会や家族会をご紹介する場合もあります。紹介や連携機関としては、ハートツリー、南紀若者サポートステーション、田辺保健所、教育研究所、学校、医療機関、ゆめふるなどがあります。

次に、事例を紹介します。しばらく自宅で過ごした時期があっても、相談機関につながったことで、支援を受け、作業所や就労につながっているという例と、どこにも相談せず40代を迎えており、ひきこもる期間が長くなっている例です。ひきこもりが長期に及ばないように、できるだけ早く相談していただければ、何かのきっかけで例のように社会へつながる方もおられます。

最後に、支援の課題を挙げています。一つは、不登校・中退からのひきこもり予防です。不登校・中退の方がすべて、ひきこもるという訳ではありませんが、在学中に支援を受けていても、所属がなくなり支援が途絶えてしまう場合があります。高校などと連携し切れ目のない支援ができたらと思います。二つ目は、40歳以上の方に対する支援です。ひきこもりが長期に及んでいて精神的な症状が出ている場合や、社会生活の中で失敗体験が重なり社会復帰が難しい方などがあり、保護者の高齢化により経済的な不安を抱えている方もおられます。40歳以上は、ハートツリーやサポステの対象外なので、どのように支援するか難しい現状です。来年度からは、生活困窮者への取組も開始されますので、そういった部署との連携も必要になるのではと考えています。

〔田辺保健所〕

田辺保健所のひきこもりについての関わりをお話します。

田辺保健所の精神保健福祉業務(抜粋)の資料、嘱託医によるこころの相談日程表を配付しています。

保健所では、こころの病に悩む人の増加により、嘱託医や精神保健福祉相談員等による相談や、必要に応じて家庭訪問を行っています。相談内容は多岐にわたり複雑化しています。

相談業務では、こころの健康相談事業、思春期精神保健事業などがあり、ひきこもりの相談もこの中で受けています。嘱託医による相談は年間24回で、それ以外の日は精神保健福祉相談員や保健師が随時相談を受けています。

平成25年度は、来所相談件数115件、家庭訪問は387件で合わせて約500件です。内容は、統合失調症で医療機関に繋がっていない方、アルコール依存症で連続飲酒している方、ひきこもりの方など多岐にわたっています。そのうちひきこもりの相談件数は9件、家庭訪問は28件です。

思春期におけるこころの問題はいじめ、不登校、家庭内暴力、ひきこもりなど多様化して現れます。保健所では、医学的な視点から精神科医をはじめとする体制で、教育機関とともに思春期の子どもを支援しています。思春期のこころの相談は、児童精神科医が相談に応じています。

本人や家族からの相談が主ですが、市・町の職員からの相談もあります。民生児童委

員さんは、地域の方と密接に繋がってられますよね。地域住民の方のことで何かありましたらご相談下さい。嘱託医によるこころの健康相談の場合は、予定日の一週間前までにご連絡を頂ければ調整しやすいと思います。

自殺予防対策として、うつの方の自殺予防もやっています。管内に自殺志願でやってきた方が、自殺を思いとどまり回復支援施設などを利用して回復していかれます。その中には以前ひきこもっていた方で自殺を志願して管内にやって来たと言う方もいました。

市のひきこもり相談窓口に来られた方が、統合失調症圏の疾病を持ってそうだとということで、保健所に繋がったケースもあります。一年ほどひきこもっていた方ですが、保健所が介入し医療へ繋がり、今は障害者施設に通っておられます。

地域にはひきこもりの相談窓口が種々あります。その中で保健所は、精神疾患を持つひきこもりの方を医療に繋げることを主としています。

なにかありましたら、お気軽にご相談下さい。

〔ハートツリー〕

NPO法人ハートツリーの中に、ひきこもり青年の居場所ハートツリーがあります。

ハートツリーでは、相談、ミーティング、レクリエーション、お菓子作り、社会体験活動などをしています。

基礎的生活リズムを付けるようにしています。ひきこもりの方は、自分流の生活があったり、昼夜逆転していたり、食事が欠けていたり、食べすぎていたり、運動していなかったりする場合があります。

4時間程度、居場所で仲間と一緒に過ごします。

個人の相談で、解決策を考えていきます。

ミーティングで、月1回、次の予定を話します。月1回くらいイベントで出かけ、お菓子を持って行って販売したりします。そこでの経験が、蓄積されていきます。人前に出るには、勇気がいります。販売などで、分からないこともあります。分からないことを知っていくことが良い経験になります。スタッフがフォローして、一緒に考えています。

焼き菓子を作っています。ちゃんとして製品を作ることを知るということもしています。

本人、ご家族の困っていることや悩みを相談できます。それぞれの家庭事情は様々です。ハートツリーには現在、10名利用している方がいて、そのうち5名が外に出てこれないので、家庭訪問をしています。色んな事情や悩みを持っています。

居場所から外へ出る練習をしています。菓子販売や、社会体験活動などもしています。社会体験活動は、他のNPO法人や、一般事業所などで行っています。中学校の職業体験のようなものです。

元気になっていったら、将来の決定をします。ここまでたどりつくのに5～10年かかることもあり、5年ひきこもっていた方は、巣立って行くのに、5年では難しいです。

作業所、一般就労、大学進学などを行っています。

家から出てきて、ハートツリーで休憩して、心配ごとをなくして次へ進みます。

一般就労は、人に会わない掃除の仕事、車屋さんなどに行きます。初めての社会で上手いかなかったり、先輩の言うことを聞かなかつたりする場合があります。

利用の流れとしては、居場所の見学をして、面談します。面談は、本人、親御さんとなります。1カ月の無料体験が出来ます。

利用には、医師の意見書が必要になります。2つの利用の仕方があって、利用者と登録者です。登録の場合は、保健所長の意見書でもいけます。

利用には、精神疾患、統合失調症、うつ病、躁鬱病でないという条件があり、証明を提出するために、医師の意見書が必要です。医療にかかってない方は、一緒に付き添って病院へ行く場合もあります。

同意書も必要になります。ひきこもり者社会参加支援センターは、各市・町と和歌山県

Ⅲ-2. 支援の報告

からの補助金をもらっています。在住の各市町に名前や住所を報告することへの同意書です。

元気になってきている方は、毎日来所しています。

ひきこもりは、螺旋階段のようだとされます。回復には、螺旋階段をイメージ、一步一步上がって行くこととなります。それをスタッフが支援しています。

〔南紀若者サポートステーション〕

NPO法人ハートツリー1つの事業としてサポートステーション事業をしています。

サポートステーションは、全国 160 カ所、和歌山では、和歌山市、橋本市、田辺市の3ヶ所にあります。15 歳～39 歳の職業につけていない若年無業者(ニート、フリーター)の方が対象です。

仕事に対する不安や悩みをお持ちの方やそのほか様々な課題を持つ方などの就労を考える時にどうサポートするかキャリアカウンセラーが相談を受けています。面接、履歴書の書き方などをレクチャーしたりします。イベントでコミュニケーション講座を通してなど、対人関係についてのトレーニングもしています。

対象地区はみなべから以南のため、本宮や新宮もエリアになります。

母体のNPO法人ハートツリーが「ひきこもり者社会参加支援センター」ですので不登校やひきこもりの課題を持つ方も支援しており、居場所につなげたり、訪問支援員が家庭訪問したりします。

東牟婁圏域は、資源が少なく、串本・新宮で関わっているケースも多いです。串本で廃校の一室を借りて、サテライトを開設しています。相談、イベント、居場所的な場所にもなっています。

ひきこもりは、外部の人との接触が少なく、幼い印象がある方もいます。

家族以外の他者との関わり、特に思春期に、不登校などの経験で「家族以外の関係性」を避けてしまうことにより、こころの発達が未熟な段階で留まっている場合も多くあり、自己愛が強かったり、不安定、過剰に自分を責めたり、過剰に他人に責任を押し付けたりする場合があります。

自傷行為、リストカット、オーバードーズ、誇大過ぎる自己イメージ、万能感、要求が叶えられない怒りから家庭内暴力など、共通して、幼い部分があるのではないかと思います。若者の「こころ」が成熟するためには、他者との関わりのやりなおしをする場所が大切です。同世代、同じ悩みを共有することで、こころの発達が少しずつ進みます。失敗と成功を積み重ねる中間的な居場所が大切です。

社会では、理不尽なことも起こります。失敗しても仕方がない、次に挽回すればいいという力を本人自身が身に付けることが大切です。

訪問支援もしています。少しでもご本人やご家族の荷物を一緒に背負って、問題解決をしていくことができればと思います。地域の中で何かあったら、関係機関に連絡をしていただければ、何が出来るかを一緒に考えていけたらと思います。

【ひきこもり検討委員会 委員長あいさつ】

(6) 田辺市ひきこもり検討委員会(平成 26 年度)議題

(出席者はひきこもり検討委員の人数)

第 1 回 (H26. 4. 26) 出席者 23 名	第 2 回 (H26. 10. 25) 出席者 24 名
<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員紹介 ・ 委員改選 ・ 田辺市のひきこもり支援について 平成 25 年度事業報告 平成 26 年度事業計画 ・ その他 関係機関の紹介及び意見交換 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 田辺市のひきこもり支援について 平成 26 年度上半期事業報告 平成 26 年度下半期事業計画 ・ 関係機関からの報告 ・ 講演 『中学校におけるひきこもり予防の試み 「人生グラフ with コラージュ」を 活用したグループアプローチの導入』 紀南こころの医療センター 臨床心理学博士 東 知幸 氏 

小委員会(平成 26 年度)議題(出席者はひきこもり検討小委員の人数)

<p>第 1 回 (H26. 5. 8) 出席者 9 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講演会について ・ 行政局講座について ・ 小委員会の計画について ・ 中学校での取組について ・ 取組の紹介(障害福祉室) 	<p>第 6 回 (H26. 11. 13) 出席者 8 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講演会について ・ 平成 27 年度の取組について ・ 平成 27 年度ひきこもり検討委員選出 について
<p>第 2 回 (H26. 6. 12) 出席者 8 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行政局講座について ・ 中学校での取組について ・ 取組の紹介(保健所) 	<p>第 7 回 (H26. 12. 11) 出席者 7 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 27 年度講演会講師について ・ 現状と課題 ・ 取組の紹介(やおき福祉会・ふたば福祉会)
<p>第 3 回 (H26. 7. 10)</p> <p>※ 台風のため中止</p>	<p>第 8 回 (H27. 1. 8) 出席者 8 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 27 年度講演会講師について ・ 来年度の取組について ・ 平成 26 年度まとめ(冊子)について ・ 取組の紹介(南紀若者サポートステーション)
<p>第 4 回 (H26. 8. 7) 出席者 11 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講演会について ・ 第2回大委員会講師について ・ 現状と課題について ・ 中学校での取組について ・ 取組の紹介(生涯学習課) 	<p>第 9 回 (H27. 2. 12) 出席者 8 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 27 年度講演会講師について ・ 支援の報告 ・ 平成 26 年度まとめ(冊子)について ・ 取組の紹介(紀南こころの医療センター)
<p>第 5 回 (H26. 9. 11) 出席者 7 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講演会について ・ 行政局講座について ・ 中学校での取組について ・ 高校報告 ・ 取組の紹介(ハートツリー) 	<p>第 10 回 (H27. 3. 12) 出席者 7 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 27 年度講演会講師について ・ 平成 27 年度事業計画について ・ 平成 27 年度ひきこもり検討委員会について ・ 平成 26 年度まとめ(冊子)について ・ 取組の紹介(学校教育課)

(7) 中学校での取組について

【日 時】平成 26 年 8 月 22 日(金)

【場 所】市内 A 中学校

【対 象 者】3 年生

【参 加 者】14 名(うち 1 名は途中退室)

【ス タ ッ フ】学校職員(3 名)、ひきこもり検討委員(3 名)、ひきこもり相談窓口(2 名)



【経緯】

ひきこもると、そこから抜け出すのは容易ではなく、ひきこもり支援においてはその予防及び早期支援が重要課題となる。しかし、いざ、ひきこもり状態になった時、専門家に相談した経験のない方や相談機関についてあまり知識のない方が実際に相談機関へ足を運ぶハードルは高い。

そこで、ひきこもり状態になった場合、あるいは不適應状態になったとき、どのような支援を受けることができるのかを中学校や高校などの在学中に知ってもらい、相談への心理的なハードルを下げてもらうことで、早期支援が可能になると考えられる。

相談機関を周知させる具体的取組として、中学生や高校生など 10 代の生徒に対して PR することが将来のひきこもり予防に効果的であると考え、今年度はモデル的に市内の中学校にご協力をいただき実施する。

【目的】

- ・相談機関の周知を図る。
- ・将来の自分はどのように生きていきたいかグループの中で考えることにより、楽しみながら自己理解と他者理解を深め、自己成長の機会とする。

【方法】

過去・現在・未来の人生グラフを描き、人生に関連した写真、気に入った写真を雑誌から切り抜いてコラージュする「人生グラフ with コラージュ」(LGT+C) (紀南こころの医療センター／臨床心理学博士:東 知幸氏考案)というエクササイズを活用したワークショップ(体験学習)を行う。ワークショップのまとめの中で、将来ひきこもりや不適應状態になったときの対処として、相談機関の紹介を行う。

《所要時間:110 分》

- ①イントロダクション(10 分)
- ②エクササイズ:グループに分かれて、LGT+C の制作を行う(休憩込で 60 分)
- ③シェアリング:グループ内で一人ずつ順番に作品の紹介を行う(15 分)
- ④まとめ、相談機関の紹介(15 分)
- ⑤感想文記入(10 分)

(8) ひきこもり検討委員会 講義

『中学校におけるひきこもり予防の試み

「人生グラフ with コラージュ」を活用したグループアプローチの導入』



講師：紀南こころの医療センター臨床心理学博士 東 知幸 氏

日時：平成 26 年 8 月 22 日(金)

参加者：33 人(事務局含む)

はじめに

3 年前のひきこもり検討大委員会で発表させていただいた、「田辺市におけるひきこもり相談 10 年の成果と課題」(東, 2012)の中で、今後の課題として次の4点を挙げました。①1 回だけの相談で終わってしまう事例が多い中で、どのようにして継続相談へとつなげていけばよいか。②家族会、青年自助会、居場所施設などは現状で十分だろうか。③一旦、ひきこもってしまうと改善するための支援は容易ではなく、ひきこもりの支援には予防が重要となります。そこで、ひきこもり予防のために何ができるだろうかということ。④この地域内にひきこもり青年がどれだけいるのか把握ができていないこと。

平成 26 年度、ひきこもり検討小委員会ではひきこもりの予防活動について検討しました。予防医学には一次予防、二次予防、三次予防という考え方があります。一次予防というのは問題を未然に防ぐこと、二次予防が早期に支援すること、三次予防が再発防止となっています。ひきこもりの早期支援、つまりひきこもりの二次予防を行うためにはひきこもり相談窓口や地域の支援機関について、さらに周知していくことが必要であるということになり、その結果、市内の中学生に対して「人生グラフ with コラージュ」(LGT+C) (東, 2013a; 2013b)という技法を用いたワークショップを行う中で、相談機関の周知を試みるということが決定されました。

人生グラフテスト 人生グラフテスト(LGT) (東, 2010a; 2010b; 2011)とは受検者に過去から現在までの人生の浮き沈みをグラフで描いてもらい、浮き沈みに関連する出来事を併せて書きこんでもらう心理テストです。グラフの横軸は年齢軸となっています。縦軸はその時期における評価で 100 点満点となっています。受検者の歩んできた人生史と、その人生をどのように認識しているかといった人生観を理解しやすいので、心理面接で活用すると有益です。実際に紀南こころの医療センターでもインテーク面接(初回面接)で使うことが多いです。

LGT+C LGT 用紙が A4 サイズであるのに対して、この LGT+C の用紙は A3 サイズとなっています。LGT+C は人生グラフテストにコラージュを組み合わせたものです。コラージュとは雑誌などから写真やイラストなどを切り貼りする技法です。紀南病院と紀南こころの医療センターでは毎年病院の新人看護職員を対象に LGT+C を活用したワークショップを行っていますが、そのワークショップの心理的効果について質的データを分析したところ、【肯定的気分】【動機づけの強化】【人間理解の深まり】などの効果があることが示唆されました。

LGT+C を活用したワークショップ LGT+C を活用したワークショップの前後で、「不安・緊張」「抑うつ・落ち込み」「怒り・敵意」「活気」「疲労」「混乱」の6つの気分状態を測定することができる POMS 気分調査票と生きがい感を測定することができる PIL を実施したところ、ワークショップの前後でいずれも得点が有意に改善しており、参加者の気分状態と生きがい感を向上させることが示唆されました。ところで、2012 年に出版された「カウンセリング研究」という雑誌(第 45 巻第 1 号)に草野智洋さんが「大学生におけるひきこもり傾向と人生の意味・目的意識との関連」という論文を発表しております。この論文は大学生を対象とした調査ですが、ひきこもり傾向は生きがい感と関連しているとして、ひきこもり予防には生きが

い感を向上させることが大切であると述べています。つまり、先行研究で生きがい感を向上させることが示唆されている LGT+C を活用したワークショップはひきこもり予防活動にはうってつけだということができるでしょう。

ワークショップの目的

ワークショップを実施する目的についてですが、相談機関の周知を図ることがひきこもりの早期支援を実現することにつながり、ひきこもりの二次予防になると考えられます。さらに、将来の自分はどのように生きていきたいかグループの中で考えることで楽しみながら自己理解と他者理解を深めることができ、それが生徒の心理的成長の機会となり、ひきこもりを未然に防ぐ一次予防になると考えられます。

ワークショップの方法

2014年8月22日の金曜日、13時から14時50分まで、A中学校の特別教室で3年生14名を対象にワークショップを行いました。14名中1名は途中で退室されています。スタッフは8名でひきこもり検討委員が3名、ひきこもり相談窓口から2名、A中学校の教員が3名で教頭先生、担任の先生、養護教諭でした。用具はLGT+C用紙、のり、はさみ、色ペン、修正ペン、円形シール、そしてコラージュに必要なさまざまなジャンルの雑誌数十冊を用意しました。

ワークショップの手続きは次の通りです。①イントロダクション(10分)、②エクササイズ(休憩込みで60分)、LGT+Cの制作を行います。③シェアリング(15分)、グループ内で一人ずつ順番に作品の紹介を行います。④まとめ、相談機関の紹介(15分)、⑤感想文記入(10分)。

イントロダクション 3グループに分かれて着席してもらい、最初にひきこもり相談窓口のスタッフがひきこもり予防活動の一環としてワークショップを行うことを説明しました。次にワークショップのリーダー役を務める私が教示を行いました。教示は「過去・現在・未来にわたる人生の浮き沈みをグラフで描いてください。書きたくないことは描く必要はありません。グラフの現在の位置にはシールを貼ってください。そして人生に関連する写真を雑誌から切り抜いて貼り付けてください。必ずしも人生に関連していなくても気に入った写真があれば自由に貼ってください」です。

エクササイズ 教示後すぐに課題に取りかかる者、なかなか課題に取りかからない者など制作の様子は様々でありましたが、全体的に和やかな雰囲気でした。スタッフは適宜グループをまわって「面白い未来やね」などと生徒に声をかけたりしました。

シェアリング 1人2分を目安にグループ内で順番に作品を発表してもらいました。聴き手は作品に対して自由に感想を述べたり、質問するなどして理解を深めるように伝えました。その際、批判的なことであつたり、発表者を傷つけるようなことは決して言わないように注意を促しました。

まとめ ワークショップのまとめとして、「人生は山あり谷ありで、良いときもあれば悪いときもあります。しかし、困ったことがあってもみなさんサポートしてくれる人はたくさんいますのでご安心ください」などと、リーダーが説明した後、ひきこもり相談窓口やハートツリーの実際のスタッフが各支援機関の紹介を行いました。

さらに、「人生グラフのように過去は現在に、現在は未来につながっています。毎日の努力は未来につながっているのです、決して無駄にはなりません。思い描いた将来が実現できるように、これから先自分のできる範囲で頑張っていくてください」などと伝えました。

感想文の記入と作品の撮影 ワークショップの感想文について、参加者に「ひきこもり検討委員会での報告、ひきこもり検討委員会が作成する報告書等に匿名での掲載を予定しているのです、掲載されても良いことだけ書いてください」と説明した上で感想文を書いてもらいました。LGT+C 作品についても、「委員会での報告や報告書等への掲載に使わせてくださる方のみで結構です」と説明した上で写真を撮らせてもらいました。

ます。また、【肯定的気分】【動機づけの強化】【人間理解の深まり】という心理的効果は新人看護職員を対象とした先行研究(東, 2013a)と同じものであり、対象が中学生であってもこれらの心理的効果をもつことが再現されたということが出来ます。

今後の課題

最後に、今後の課題を挙げさせていただきました。まず、ひきこもり予防活動の一環として、今後も田辺市内のより多くの中学校でLGT+Cを活用したワークショップを実施していきたいと考えています。二つ目として、今回は感想文という質的データをもとにワークショップの心理的効果を調査しましたが、今後は量的データでもそれを裏付けていく必要があると考えています。三つ目として、LGT+Cを活用したワークショップへの理解を促すために、例えば学校の教員を対象としたワークショップを開催してみてもどうかと考えております。

文献

- 東知幸(2010a). 人生グラフテストの開発. 精神科治療学, 25, 259-266.
東知幸(2010b). 人生グラフテストとライフイベント. 最新精神医学, 15, 177-184.
東知幸(2011). 人生グラフテストの基礎研究. 平成22年度京都文教大学大学院臨床心理学研究科博士論文. 未公刊.
東知幸(2012). 田辺市におけるひきこもり相談10年間の成果と課題. 田辺市ひきこもり支援一窓口開設11年目の報告, 24-30.
東知幸(2013a). コラージュを組み合わせた人生グラフテストを用いたグループワークがもたらす心理的効果. 心理臨床学研究, 31, 541-551.
東知幸(2013b). コラージュを組み合わせた人生グラフテストを用いたグループワークが生きがい感に与える効果. 日本コラージュ療法学会第5回大会プログラム・抄録集.



イントロダクション



エクササイズ



シェアリング

《資料》

田辺市ひきこもり検討大委員会(2014.10.25)

中学校におけるひきこもり予防の試み

「人生グラフ with コラージュ」を活用したグループアプローチの導入

東 知幸
(紀南こころの医療センター)

はじめに

「田辺市におけるひきこもり相談10年間の成果と課題」(東, 2012)では今後の課題として以下の4点が挙げられている。

- ①継続相談につなげるには？
- ②家族会などは現状で十分であるか？
- ③ひきこもりの予防のために何ができるか？
- ④地域内にひきこもり青年がどれだけいるか？

はじめに

平成26年度、ひきこもり検討小委員会ではひきこもりの予防活動について検討した。

↓

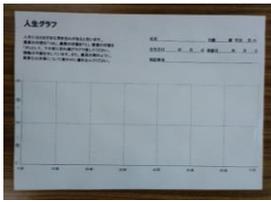
ひきこもりの**早期支援(二次予防)**を行うためにひきこもり相談窓口や地域の支援機関についてさらに周知していくことが必要である。

↓

中学生に対して「**人生グラフ with コラージュ**」というワークショップ(WS)を導入する中で、相談機関の周知を試みることを決定した。

人生グラフテスト

人生グラフテスト(LGT)(東, 2010a; 2010b; 2011)とは受検者に過去～現在までの人生の浮き沈みをグラフで描いてもらい、関連する出来事を併せて書きこんでもらう心理テストである。



受検者の人生史と人生観を理解しやすいので、**心理面接で活用すると有益である。**

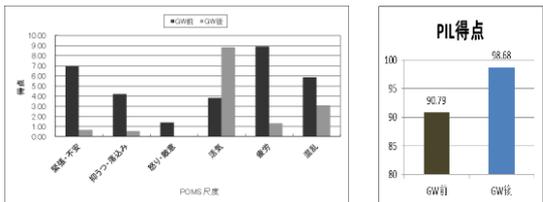
「人生グラフ with コラージュ」

「**人生グラフ with コラージュ**」(LGT+C)(東, 2013a; 2013b)とは人生グラフテストにコラージュを組み合わせたものである。

病院の新人看護職員を対象に行われたLGT+Cを活用したWSの心理的効果について質的分析をしたところ、**【肯定的気分】【動機づけの強化】【人間理解の深まり】**などの効果があることが示唆された。



LGT+Cを活用したWS



LGT+Cを活用したWSの前後でPOMS気分調査票とPIL生きがい尺度を実施したところ、参加者の**気分状態と生きがい感は有意に改善していた。**

WSの目的

- ①ひきこもりの早期支援を実現するために**相談機関の周知**を図る。
⇒**ひきこもりの二次予防**
- ②将来の自分はどのように生きていきたいかグループの中で考えることにより、楽しみながら自己理解と他者理解を深め、生徒の**心理的成長の機会**とする。
⇒**ひきこもりの一次予防**

WSの方法

日時 2014年8月22日(金) 13:00-14:50
場所 A中学校特別教室
参加者 A中学校3年生14名(うち1名途中退室)
スタッフ 8名
ひきこもり検討委員3名
ひきこもり相談窓口スタッフ2名
A中学校3名(教頭、担任、養護教諭)
用具 LGT+C用紙、のり、はさみ、色ペン、修正ペン、円形シール、**さまざまなジャンルの雑誌数十冊**

WSの方法

手続き

時間:110分

- ① **イントロダクション** (10分)
- ② **エクササイズ** (休憩込で60分)
LGT+Cの制作を行う
- ③ **シェアリング** (15分)
グループ内で一人ずつ順番に作品の紹介を行う
- ④ **まとめ**、相談機関の紹介 (15分)
- ⑤ 感想文記入 (10分)

イントロダクション

3グループに分かれて着席してもらった。最初にひきこもり相談窓口のスタッフが、ひきこもり予防活動の一環としてWSを行うことを説明した。次に、WSのリーダーである筆者が**教示**を行った。

過去・現在・未来にわたる人生の浮き沈みをグラフで描いてください。書きたくないことは書く必要はありません。グラフの現在の位置にはシールを貼ってください。そして人生に関連する写真を雑誌から切り抜いて貼り付けてください。必ずしも人生に関連していなくても気に入った写真があれば自由に貼ってください。

エクササイズ

教示後、すぐに課題に取りかかる者、なかなか課題に取りかからない者など、制作の様子は様々であったが、全体的に和やかな雰囲気であった。スタッフは適宜グループをまわり、「面白い未来やね」などと生徒に声をかけた。



シェアリング

1人2分を目安にグループ内で順番に作品を発表してもらった。

聞き手は作品に対して自由に感想を述べたり、質問するなどして理解を深めるように伝えた。その際、**批判的なこと、相手を傷つけるようなことは決して言わないように注意を促した。**



まとめ①

人生は山あり谷ありで、良いときもあれば悪いときもあります。しかし、困ったことがあってもみなさんをサポートしてくれる人はたくさんいますのでご安心ください



リーダーの説明の後、ひきこもり相談窓口やハートツリーの実際のスタッフが各支援機関の紹介をした。

まとめ②

人生グラフのように過去は現在に、現在は未来につながっています。毎日の努力は未来につながっているので、決して無駄にはなりません。思い描いた将来が実現できるように、これから先自分のできる範囲で頑張っていってください。



感想文の記入と作品の撮影

LGT+Cを活用したWSの感想文について、ひきこもり検討委員会での報告、ひきこもり検討委員会が作成する報告書等に匿名での掲載を予定しているので、掲載されても良いことだけ書いてくださいと説明した上で感想文を書いてもらった。

LGT+C作品についても、委員会での報告や報告書等への掲載に使わせてくださる方のみで結構ですと説明した上で、写真を撮らせてもらった。

分析方法

LGT+Cを活用したWSの心理的効果を調査するために、感想文を木下康仁の提案した**修正版グラウンデッドセオリー法(M-GTA)**を用いて分析した。

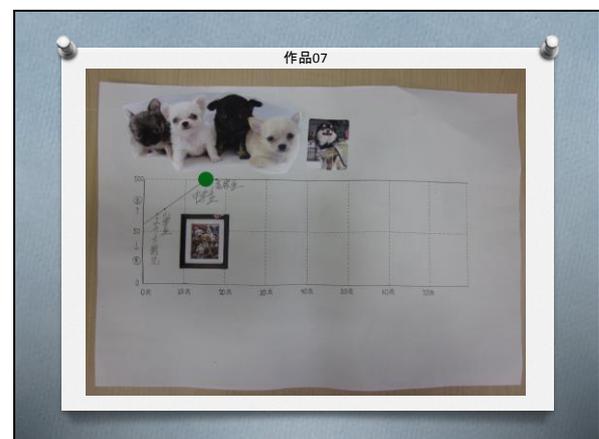
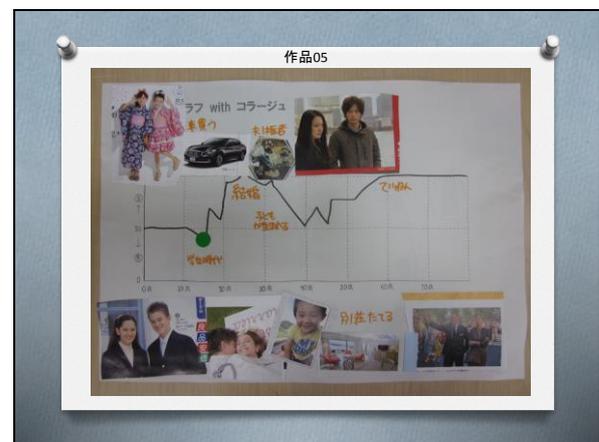
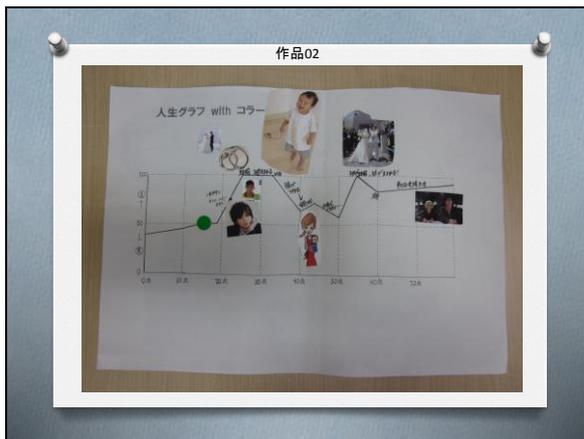
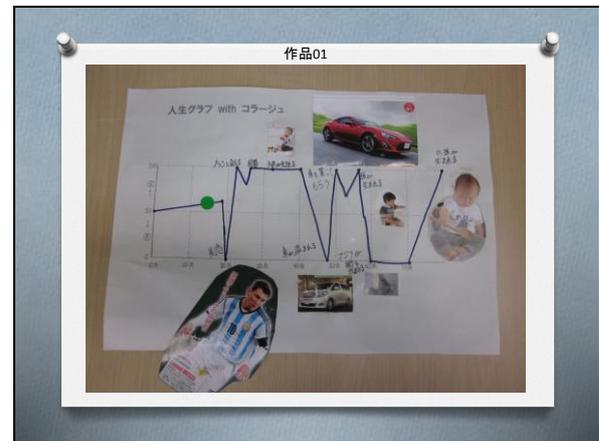
M-GTAとは感想文を意味のまとまりごとに要約して**概念化**し、さらに概念を要約して**カテゴリー化**していく方法である。

M-GTAは筆者(臨床心理士)ともう一人のひきこもり検討委員(臨床心理士)の2名で行った。

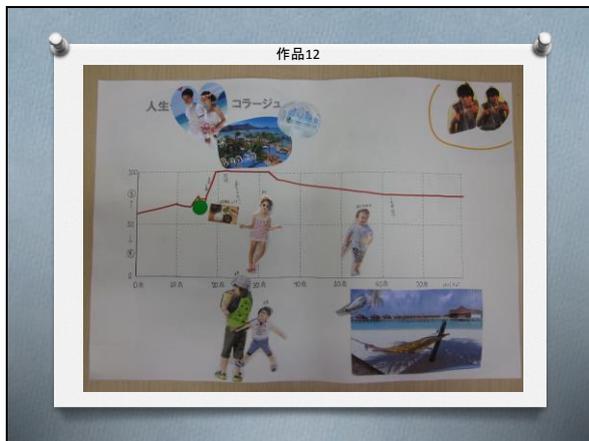
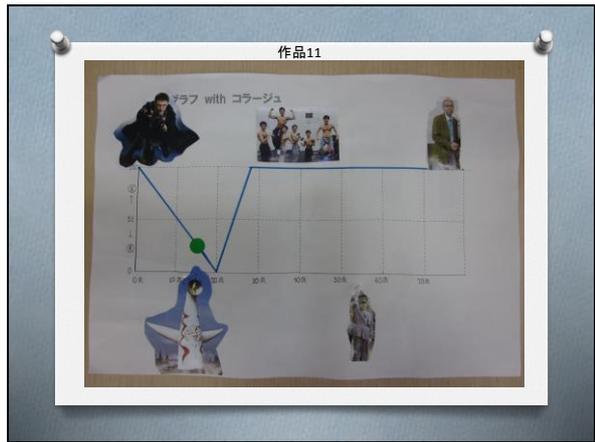
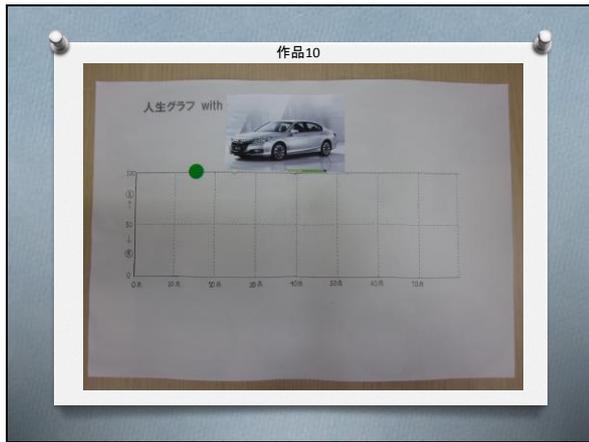
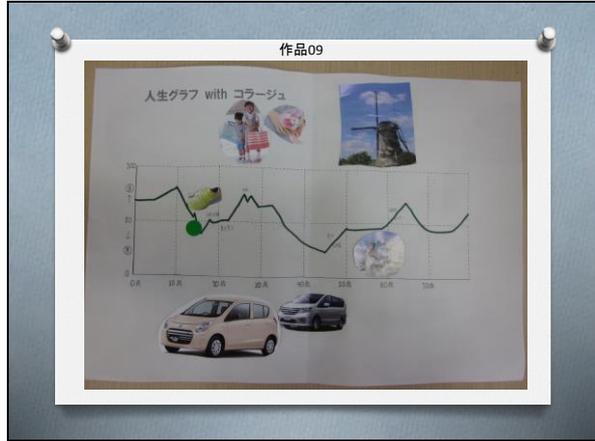
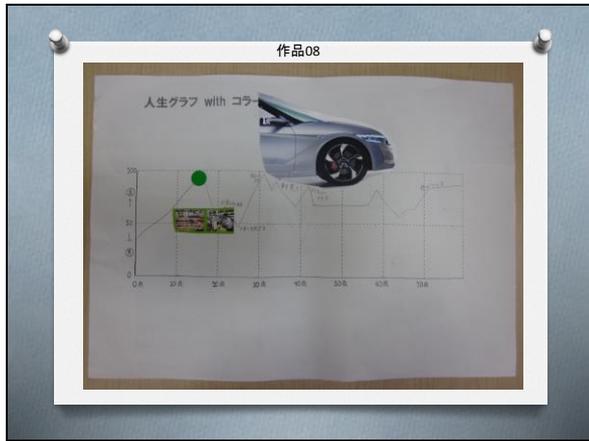
結果

作品について、参加者13名から写真撮影への許可が得られた。全員が良い未来を想像していた。

感想文について、参加者13名から記入してもらうことができた(平均字数は118字)。
全員が「楽しかった」あるいは「面白かった」などの記述をしていた。



Ⅲ-2. 支援の報告



感想A

過去のことより、未来のことを書くことが多かったので、けっこう楽しかった。未来の事を想像してコラージュするのが良かった。未来の事なので分からないけど、今日書いたことが、本当に叶うとうれしい。みんなけっこう早めで結婚して、子供産んで、孫ができた。またしたいと思った。

感想B

楽しかった!!自分の未来を考えるのは、少しとまどったけど、考えていると、いろいろ出てきて楽しかった!ほかの人も自分とは違う考え方だったので、おもしろかった。こういう感じの未来図が出来たら幸せだなと思いました。人生を楽しんで生きたいと思いました。

感想C

楽しかったです。最初はどの写真をはろうか悩んだけど、やってみると楽しいことばっか思い浮かんだので、すらすらできました。自分が作った未来図と同じようになればいいなと思いました。これからいい人と出会いたいです!!

感想D

楽しかった！普段、将来について考えるのは重く感じるけど、コラージュをして考えたら、楽しく考えられたし、将来、こういしたいなと思えることができた。来て下さった方々達がとても優しい人達だったから、ひきこもりセンターへも気軽に行けるなあと感じた。

感想E

コラージュを作るのは、とても楽しかった。未来の事を考えるのが、迷ったりしたけど、楽しく考えられたので良かった。ひきこもりの人が、相談する施設があることは知らなかった。困っている人が相談できる場所を作ることは、困っている人も助かるので、すごくいいことだと思った。私も困った人の相談を受けられるような人になれたらいいなと思いました。

感想F

今日のグループワークは、普通の授業とは違って、楽しかった。僕は、想像するのがあまり得意ではないので、未来のことは人生グラフに書くことができませんでした。でも、僕は犬が好きなので、犬に囲まれて生きていこうと思います。

感想G

今日の授業は、ぜんぜん書けませんでした。でも、楽しかったです。コラージュで、車を買ったので、本当に買いたいです。

感想H

人生グラフを初めて作った。思っていたより、自由に作れたので、楽しかった。考え方が新しい人がいた。想像するのがおもしろかった。少し夢を見過ぎた。考え方は人それぞれだと思った。時間がいっぱいあると思っていただけ、人生グラフを作っていたら、とても短く感じた。

感想I

グループワークは、普通の授業でもするけど、人生グラフを書いて発表するのは初めてだったけど楽しかったです。僕は、あまり写真をはれなかったけど、班のみんなは、いろんな写真をはっていたり、自分の思った人生を書いていたので、とても良かったです。今日書いたような人生になったらいいです。

感想J

こうやって人生withコラージュにこれまでの人生や、これからの未来を書いてみると、山あり谷ありのグラフになりました。本当にこんな人生になればいいなと思ったけど、本当になってしまったらおもしろくないだろうなと思いました。臨床心理士さんがおっしゃっていた「今の毎日が未来につながっている」ということが分かりました。雑誌の写真をはってみると、未来が楽しみになってきました。これから頑張って、楽しい人生にしていきたいと思いました。

感想K

自分の人生を考えると意外と楽しかったです。みんな、それぞれの人生があるんだなと思いました。他の人の作品を見たら、上がったり下がったりしていたので、人生は上がったり下がったりするのかなと思いました。人生グラフのようになればいいと思いました。

感想L

ふざけて、少し楽しかった。想像が広がり、今日は、夢にマッチョができてそうです。

感想M

雑誌から、自分の将来の出来事の写真を抜き取る作業が、面白かったです。車を盗まれないように頑張ります。人生のどん底に落ちても、希望を信じて最後の最後まで生き抜きたいと思います。

結果と考察

概念の生成

《楽しさ》
LGT+Cを活用したWSで楽しく感じること
『未来のことを書くことが多かったので、結構楽しかった』
『コラージュを作るのはとても楽しかった』

《面白さ》
LGT+Cを活用したWSで面白いと感じること
『自分の将来の出来事の写真を抜き取る作業が面白かったです』
『想像するのが面白かった』

結果と考察

概念の生成

《将来への期待》
将来に対する期待感が強まること
『こういう感じの未来図が出来たら幸せだなと思いました』
『人生グラフのようになればいいと思いました』

《今後の抱負》
今後頑張っていきたいという思いが強まること
『人生のどん底に落ちても、希望を信じて最後の最後まで生き抜きたいと思います』
『これから頑張って楽しい人生にしていきたいと思いました』

結果と考察

概念の生成

《自己理解と他者理解》
自分は他者と違う存在だと理解すること
『他の人も自分とは違う考え方だった』
『みんなそれぞれの人生があるんだなと思いました』

《人生の理解》
人生は山あり谷ありだと理解すること
『他の人の作品を見たら上がったり下がったりしていたので、人生は上がったり下がったりするのかなと思いました』

結果と考察

概念の生成

《相談機関の理解》
相談できる機関があることを知ること
『ひきこもりの人が相談する施設があることを知らなかった』

《相談意欲の向上》
相談機関を気軽に利用してみようと思うこと
『来て下さった方々達がとても優しくあったから、ひきこもりセンターへも気軽に行けるなと思った』

結果と考察

カテゴリの生成

【肯定的気分】 ← 概念

- 《楽しさ》
- 《面白さ》

【動機づけの強化】 ←

- 《将来への期待》
- 《今後の抱負》

【人間理解の深まり】 ←

- 《自己理解・他者理解》
- 《人生の理解》

【相談機関の利用意欲の高まり】 ←

- 《相談機関の理解》
- 《相談意欲の向上》

結果と考察

LGT+Cを活用したグループワークが【肯定的気分】
【動機づけの強化】【人間理解の深まり】に貢献。

相談機関の紹介が【相談機関の利用意欲の高まり】に貢献したと考えられるが、単なる紹介ではなく、**支援機関の実際のスタッフがWSのスタッフをつとめたことも大きな要因**であろう。

『来て下さった方々達がとても優しい人達だったから、ひきこもりセンターへも気軽に行けるなあと思った』

結論

【相談機関の利用意欲の高まり】という心理的効果が示唆されたことにより、**ひきこもりの早期支援(二次予防)につなげるために相談機関の周知を図るという当初の目的が達成できただけでなく、実際に相談機関を利用してみようという意欲も高めることができた**と考えられる。

【肯定的気分】【動機づけの強化】【人間理解の深まり】という心理的効果が示唆されたことにより、**生徒の心理的成長(一次予防)に貢献ができた**と考えられる。

今後の課題

ひきこもり予防活動の一環として、今後も田辺市内のより多くの中学校でLGT+Cを活用したWSを実施していきたい。

今回、感想文という質的データをもとに心理的効果を調査したが、量的データでもそれを裏付けていく必要がある。

LGT+Cを活用したWSへの理解を促すために教員対象のWSを開催してはどうか？

文献

- 東知幸(2010a). 人生グラフテストの開発. 精神科治療学, 25, 259-266.
- 東知幸(2010b). 人生グラフテストとライブイベント. 最新精神医学, 15, 177-184.
- 東知幸(2011). 人生グラフテストの基礎研究. 平成22年度京都文教大学大学院臨床心理学研究科博士論文. 未公開.
- 東知幸(2012). 田辺市におけるひきこもり相談10年間の成果と課題. 田辺市ひきこもり支援-窓口開設11年目の報告, 24-30.
- 東知幸(2013a). コラージュを組み合わせた人生グラフテストを用いたグループワークがもたらす心理的効果. 心理臨床学研究, 31, 541-551.
- 東知幸(2013b). コラージュを組み合わせた人生グラフテストを用いたグループワークが生きがい感に与える効果. 日本コラージュ療法学会第5回大会抄録集

《10/25(土)第2回ひきこもり検討委員会にて、A 中学校の先生より》

私は、当日の授業を非常に楽しみにしていました。

当日、不登校の生徒が登校し、教室に入りましたが、制作する頃には退席しました。どうして退席したのかを尋ねると、「自分の将来を考えられん」「あんなの出来ん」「(心の中を)のぞかれるようだ」と言いました。生徒は授業には戻れず、残念ながら当日の様子は見る事が出来ませんでした。担任から手紙を預かっているので紹介します。

【3年担任からの手紙】

事前に生徒達には、「東先生という臨床心理学の先生が、特別授業をして下さる予定です」とだけ伝えておきました。

当日は、東先生の柔らかな物腰のおかげか、生徒達も緊張しすぎることなく、和やかな雰囲気での授業が始まりました。

5人ずつの3班で活動しました。自分の人生の山や谷を想像し、グループ内で楽しく話しながら、グラフを描き始めました。特に女子は、結婚や出産(時には、離婚も...)を必ず書き入れ、随分具体的にイメージしていたように感じます。結婚式や子供の写真を、たくさんの雑誌や広告の中から一生懸命探して切り取っては、用紙に貼っていました。

“今”を現すポイントに緑のシールを貼るのですが、そのポイントを決めるよりも、0歳の時点はどう現すかで悩んでいる生徒が多かったように思います。

普段自分の考えを表現することが苦手な生徒も、グラフ、コラージュ共に仕上げる事が出来ました。

グループ内で発表する時は、進行役で付いて下さった方々やメンバーが、「これはどういうことなの？」など質問してくれることも結構ありました。どの班からも笑い声が絶えませんでした。

9月に担任の国語科の研究授業で、制作した作品を活用しました。人生グラフを眺めながら、未来予想図のような俳句を詠んでみる、というものです。

目前に迫っている、少ししんどい受験という未来を詠んだもの(「星月夜 思いどおりにいかないよ」)、結婚して新しい家庭を得た自分を詠んだもの(「笑顔の子 つれてきたのは 桃の花」)、「すみれ草 輝く新車に のる自分」)、少しウケをねらって詠んだもの(「年老いて 頭フサフサ 秋の夢」)、「幸せな 老後願うは つくしかな」など、様々でしたが、皆、東先生の授業の時と同じく、前向きに取り組んでくれました。俳句を短冊に書き、互いに読み合い、良いと思う所や感想を付箋に書いて短冊にぺたぺた貼っていきました。各自、友達の違った視点や感性に触れるのを楽しんでいるようでした。

担任は、「来年も同じようなことをぜひ同校でももらえたら、それが難しければ、今回実施後、俳句の授業にとっても入りやすかったので、自分で行って導入に取り入れようかと思う」と話し、大変満足している様子でした。

物静かなクラスですが、少し反応が変わってきました。真面目に取り組むクラスで、授業は進むのですが、生徒達からの発言がなく、少しやりにくい面もありました。2学期からは生徒達からの発言がみられ、授業が進めやすくなっています。3年生で授業研究したいという先生も現れています。生徒達は、将来に前向きに取り組始めたように感じます。心配していた体育祭も乗り切り、成功を収めました。活動し始めてきた生徒達を見て、職員も大変喜んでます。

ひきこもり相談窓口3年を終えて

ひきこもり相談窓口担当 中西 孝美

この3年間で、様々な年齢、状況の方とお会いしました。面談では、未だに緊張しますが、やっと少しゆとりが出てきたかなと思います。

担当となり、若者支援についても学ぶ機会をいただきました。中でも、2年目に参加した内閣府の研修は、私にとって、考え方を考える大きなきっかけとなりました。印象に残っているのは、「見方を変える」「今できていることに視点をあて、関わり(支援)をつくりだしていく」ということです。

来所される方は、学校へ行けない、外へ出られない、外出していても社会との接点がちづらいなど、様々な困り事を抱えています。きっとその中にも、見方を変えれば、前向きに捉えられ、次に繋がるきっかけとなることもあるのではと思います。

「本当に困ってどうしたらいいかわからない」とおっしゃられる方でも、もうすでに相談窓口に行くという行動を起こされています。

相談に行くということは、どのような場合においても、とても勇気のいることです。勇気をもって来てくださった方が、「また次も話をしに来よう」と思っていただけのように、お話を伺えればと思います。そして、その繋がりを切らさないことが、次への一歩だと信じています。

『ひきこもり相談窓口を担当して』

ひきこもり相談窓口担当 小川 香織

宮田(北田) 真紀さんの『「柔道を通じて学んだこと」～選手として、指導者として、母として～』という講演会を聞く機会がありました。失敗しても受け身を取れば、またすぐ立ち上がれる。

相談に来られた方や自分の子育ての中でも、失敗しても良い、失敗しても色んなことにチャレンジしてほしいなと思います。ただ、失敗した時のことを考えると、大きな失敗をしてしまうことを心配してしまいます。昔より、小さな失敗をたくさんするという機会が減っているのかもしれない。どうしたら失敗した時に立ち直る(受け身)をとる力がつくのか。なかなか、答えは出ないかもしれませんが、少し考えてみたいなと思いました。

自分で体験してみないと分からないことがたくさんあると思います。失敗することもあるかもしれませんが、苦手だと思っていたことが、やってみると意外にできたり、楽しかったりということもあります。ただ、その一歩を踏み出すには、時間と勇気がいると思います。そのきっかけづくりの手助けが少しでもできれば良いなと思います。外に出て、就学、就労することだけが、大切というわけではないと思います。その人の人生にとって、人に出会い、色んな経験、発見をする機会が一つでも多くあれば良いのにとと思います。

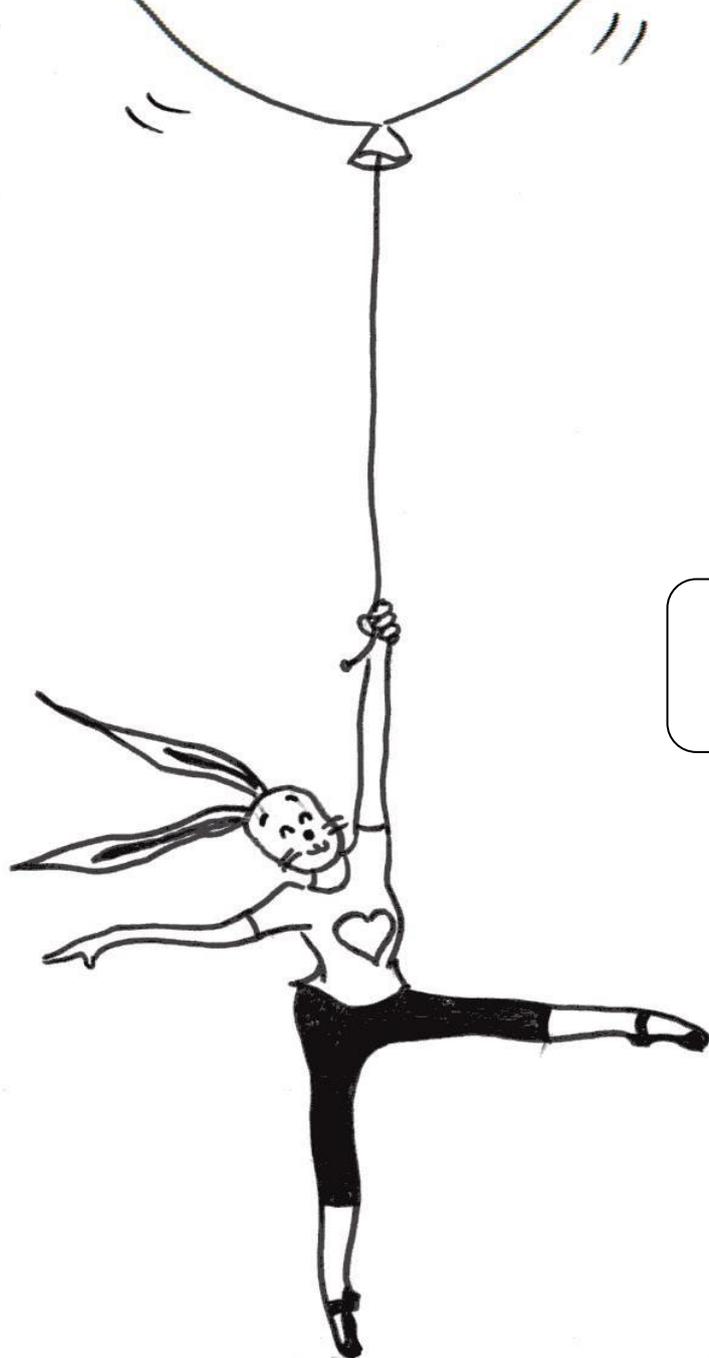
今は家族の方だけ相談に来てくれている方が、「早く相談に来て色んな人に関わってもらったから良かったのだ。」という話をしてくれました。家族の方が一歩踏み出すことが、少し時間がかかることがあっても、ご本人さんの大きな一歩に繋がることもあるのではないかなと思いました。



IV. 參考資料



家から **子ども** が
でられない
家族 でかかえこまないで
ほっこり しませんか



ほっこり会
(ひきこもり家族の会)

ついでに、明日へ

ついでに、明日へ

NPO法人 ハートツリー

〒644-0032 和歌山県和歌山市下渡敷町48番地
Tel: 0739-25-8308
Fax: 0739-54-2006
E-mail: info@heart-tree.org
HP: http://heart-tree.org

NPO法人 ハートツリー

私たちの歩み

私たちがNPO法人の始まりは、不登校生たちのサポートをしようということでした。

やがて、時がめぐり、私たちの活動はひきこもりの若者たちの支援へとつながってしまいました。

活動の中心は、ひきこもりの若者たちが、家庭以外の場所と少しずつ関わり安心して居るような居場所をつくることでした。そして、一人一人の若者に合った社会体験や話し合いの場を設けることでした。

こうして活動中に様々な悩みはいろいろな経験や思いをこたくことで次第に社会に向けて歩みはじめの力をつけていきます。

居場所でありながら若者の次のステップとして、私たちは「仕事」という課題の克服を始めました。

近年は、ひきこもりの若者に限らず、さまざまな「生きづらさ」を抱える若者たちからますます声が出てきているといわれます。彼らの多くは、多くは社会参加を求めています。日々を送っています。

私たちが「心労支援」はそうした若者に寄り添い、「居場所から」就労支援まで、その歩みを全力でサポートしています。

ついでに、明日へ

木々が地に根を生やし
枝の一本一本が広がり
豊かに実ること
水々しくなっていく！
そんな風に
心豊かになっていければ！

沿革

- 1991年 和歌山県教育センターに依り、不登校児支援センターの開設
- 1998年 青年サークル「HAPPY」の結成
- 2002年 若者の居場所推進協議会の開設
- 2002年 ハートツリー・ハラスメント・ハラスメントの開設
- 2002年 ハートツリー・ハラスメント・ハラスメントの開設
- 2004年 「Dまで」の社会参加支援センター「講座事業推進協議会の発足」
会費が0円で2012年度にもより支援の広がりが見られる。
- 2006年 特定非営利活動法人「ハートツリー」の設立
- 2008年 厚生労働省地域若者サポートステーション事業認定
「南紀若者サポートステーション」開設
和歌山県庁を母体とする「仕事」をいかにサポートの支援
- 2009年 南紀若者サポートステーション 和歌山県より事業委託
- 2014年 「若者の働き、生きる」地域づくり支援事業認定
和歌山県庁を母体とする「仕事」をいかにサポートの支援
カフェ「re:work」、和歌山県庁を母体とする「仕事」をいかにサポートの支援
和歌山県庁を母体とする「仕事」をいかにサポートの支援

ハートツリーは若者の未来への一歩を応援しています。

生きづらさや課題を抱えた若者の、安心して過ごせる「居場所」づくりから、
就労支援まで、社会へと飛び立っていくための様々な歩みをお手伝いし、全力でサポートします。

安心して過ごせる「居場所」です。
等身木の目鼻を受け入れながら、
「歩きはじめ」の力を付けていきます。

ひさごもり 若者社会参加支援センター

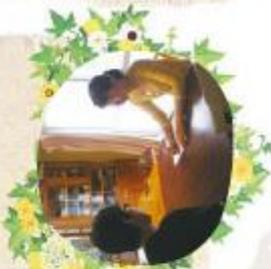
「外へ一歩踏み出したい」「進めど困る」
そんな方々に、お助けの場を創る。

「居場所」づくりの場です。

居場所・社会参加活動・レクリエーションなど



〈お問合わせ〉
〒646-0032
TEL 0735-25-3032
FAX 0735-25-3038
E-MAIL: info@higurashi.org
web: http://higurashi.org



「働くこと」
の
自信へと繋がる中間的就労の「場」

みんころ菓子工房
cafe minucoro カフェミルコロ

手作り雑貨 telet

からだに優しいお菓子とカフェ

みんころ菓子工房

cafe minucoro カフェミルコロ

〒646-0042

本歌山県田辺市赤松町 173 (赤松駅北口)

TEL 0735-24-0066

みんころ菓子工房

〒646-0042

本歌山県田辺市赤松町 173 (赤松駅北口)



「就労」に向けた
それぞれのステップアップを応援します。

南紀若者サポートステーション

(本歌山県・本歌山県若狭郡三郷町)

15歳から18歳までの若者への就労支援
「働きたいけど、働き口がない」
「働いていない期間が長いので就職できるかも心配」
「どんな仕事も自分に合っていないのかわからない」
「一人暮らしが苦手なので就職先がわからないなど」
職業的自立のためのご相談を受け付けています。
相談の場にも、積極的に関わってサポートさせていただきます。

〒646-0028 和歌山県田辺市高橋一丁目2-6-1
田辺市居合センター1階
TEL 0735-25-2111 FAX 0735-25-0085
mail: naniwa-support@naniwa-npo.jp
web: http://www.naniwa-support.jp/

生本サテライト

〒649-4105 和歌山県本町1丁目27
和歌山県本町1丁目27
TEL 0735-67-1171 FAX 0735-67-1173



「ハートツリー賛助会」入会・寄附のご案内

特定非営利活動法人ハートツリーでは、「生きづらさ」を抱えた若者の社会的自立に向けた支援を続けております。当法人の取り組みにご理解いただき、ご賛助・ご協力を頂ける賛助会員様と、「賛助」という形で活動をご支援くださる方を募集しております。皆様のご支援を心よりお喜び申し上げます。

※「ハートツリー賛助会」年会費

賛助会員 年会費 (年会費は別添付です。)

個人 1口 3,000円

団体 1口 5,000円

※寄付金

・3ヶ月で若者が安心して過ごせる「居場所」を1日分(常設+光熱水費)

・5ヶ月で一人の若者が職場体験活動費を5ヶ月受け取ることができます。

・10万円以上の方の仕事を確保するためのPCを一台購入できます。

・100万円以上の方で若者たちで作る中間的就労の場(カフェ・菓子工房)用の車庫購入

特定非営利活動法人ハートツリーは認定NPO法人取得を目指して
活動しております。(認定NPO法人取得後は取組としております。)

認定NPO法人になるための要件、パブリックサポートテスト
(PST)をクリアするには、3,000円以上×100人以上の寄付が
必要です。ご協力をお願いします。

年会費・寄付の送金方法

1. 振込み用紙を利用する

弊財団の振込取扱票(特定非営利活動法人ハートツリーと印字のもの)に
「賛助会員」または「寄付」と明記していただき、お名前、ご住所、電話番号
を記入の上、お近くの郵便局にて、送金をお願い致します。【※後日、領収書
類をお送りさせていただきます。(領収書を送るための送金印は別添付です。)

2. ゆうちょに振り込む

ゆうちょ銀行口座振込番号 00950-7-201839

名義 特定非営利活動法人 ハートツリー

郵便局の「払込取扱票」または「振込依頼書」または「寄付」と明記していただき、
お名前、ご住所、電話番号を記入の上、お近くの郵便局にて、上記口座振込
金をお願い致します。【※後日、領収書送金印をお送りさせていただきます。(領
収書を送るための送金印は別添付です。)

※ハートツリーホームページの「入会・寄付」のフォームから、
賛助会費・寄付の申込みが出来ます。



NPO法人ハートツリー

賛助会費

寄付

認定(仮認定)NPO法人への寄付者に与える控除上のメリット

・個人が寄付をした場合
国庫と地方税あわせて、寄付金額の最大50%が所得から控除されます。

・法人が寄付をした場合
一部寄付分の個人課税控除額とは別に、引当の個人課税控除額が認められ、
控除額が認められます。

NPO法人 ハートツリー

しきこもり者 社会参加支援センター
ひなたの森

しきこもり者 社会参加支援センター
ひなたの森

（お問い合わせ）
〒646-8833
和歌山県山田郡下屋敷町48番地
(tel) 0739-25-8388
(fax) 0739-34-2866
(mail) info@heart-tree.org
(web) http://heart-tree.org

相談

困っていること、生活について、将来のことなど、ご本人・ご家族からの相談。まだ外出が心配な方は、定期的な家庭訪問をご利用できます。
(安心感や安堵感をもてる環境)

ミーティング

毎月1回開催。メンバーが中心となって次月の活動予定などを決めます。

イベント参加

近辺で開催される地域のイベントでバザー出店をし、接客をします。人とのふれあいをゆるやかに体験します。

社会体験活動

居場所から一歩出て、さらに人間関係を広げ、社会参加につなげる支援です。10ヶ所程度の体験先を用意しています。「できること」を増やしていきませんか？経験の積み重ねと自信をつけていけるよう、支援します。

嘱託医による支援

個人の状態像に合わせた支援をおこなうため、専属の医師による医療的支援を実施しています。

専門家による支援

臨床心理士、保健師、社会福祉士による総合的な支援をおこないます。
(支援の指針を明らかにするためのもの)

支援の流れ

1

電話などで予約
体験利用(1ヶ月)

→

2

所定の書類による
手続きを開始。
利用を開始。

→

3

生活力を身に付け、
幅広い視野が持てるようになる。
(社会との再会段階)

→

4

一般就労、作業所など、
次のステップへ進む。

■利用対象
仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっている状態の青少年

■対象年齢
15歳～40歳までの男女

■利用料
1万円(1ヶ月・保険も含まれています)

■開所時間
月曜日～金曜日 9:00～18:00
※居場所の利用時間は13:00～17:00です
※土・日・祝・臨時休所の場合を除く
※見学、体験等、希望の方はスタッフまでご相談ください

居場所の役割

- ・ひきこもり青年の社会復帰を目指すための支援
- ・情報の提供、協力、つながり(ネットワーク)
- ・啓発活動



和歌山県・
厚生労働省
認定事業

南紀若者 サポート ステーション

働くことに
悩みを抱えている
15歳～39歳までの
若者をサポートします。

気軽に相談してね!

南紀一円をサポート!



田辺三偉人

KITAYAMA MURA

TANABE

WAKAYAMA

SHINGU



サポートエリア

南紀若者 サポートステーション

ご利用日時:月～金曜/10:00～18:00
(土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)

〒646-0028 和歌山県田辺市高雄一丁目23番1号
田辺市民総合センター北館

TEL.0739-25-2111
FAX.0739-25-0085



携帯サイトへアクセス!→

[Eメール] nanki-saposute@ec2.technowave.ne.jp
[ホームページ] http://www.nanki-saposute.jp/
[携帯サイト] http://www.nanki-saposute.jp/ktai/

串本サテライト

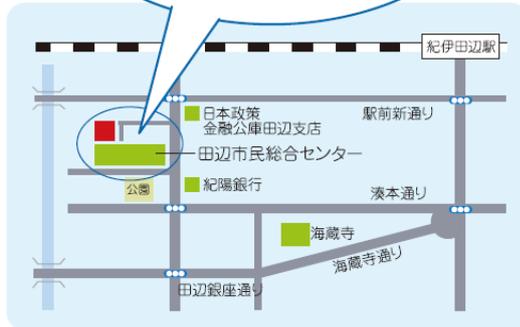
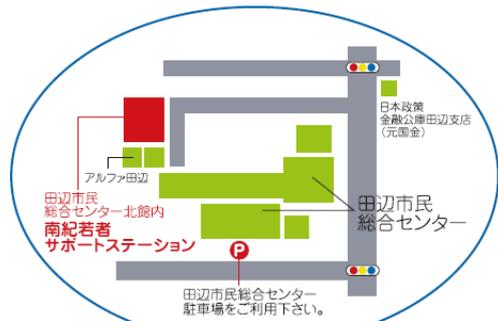
ご利用日時:火・水曜/13:00～16:00
木・金曜/11:00～16:00

東牟婁郡串本町姫27 養春小学校 2階 5・6年生教室

TEL.0735-67-7172
FAX.0735-67-7173

利用料
無料

但し、プログラム実施時に
必要に応じ実費を頂きます。



南紀若者サポートステーションは

「働くことに自信が持てない」
 「対人関係が苦手で安定した社会生活を送りにくい」
 「何かを始めたいけど、どうしたら良いか悩んでいる」

そんなあなたの **はじめての一步** を応援します！

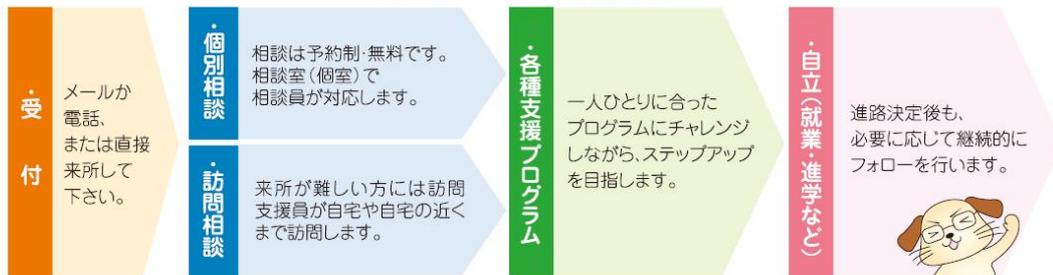


地域若者サポートステーションとは？

地域若者サポートステーション(愛称:「サポステ」)では、働くことに悩みを抱えている15歳~39歳までの若者に対し、キャリア・コンサルタントなどによる専門的な相談、コミュニケーション訓練などによるステップアップ、協力企業への職場体験などにより、就労に向けた支援を行っています。
 サポステは、厚生労働省が認定した全国各所の団体が実施しており、平成26年度は全国160か所(和歌山県内3か所)に設置されています。

愛称
サポステ

サポートの流れ



個別相談

- キャリアカウンセラーによる **働くことに関する相談**
- 臨床心理士による **こころの相談**
- 訪問支援員による **訪問相談**

各種支援プログラム

- 職業体験・見学
- ビジネスマナー講座
- パソコン講座・個別指導
- 就活セミナー
- コミュニケーション講座
- スキルアップ講座
- 保護者セミナー

出張相談会

串本町・新宮市で出張相談会を行っています。
 詳しくはお問い合わせ下さい。



サポステの安心ネットワーク

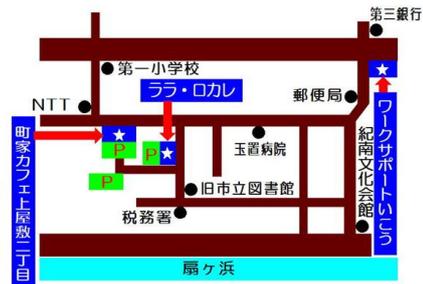
南紀若者サポートステーションは、各関係支援機関と緊密なネットワークを構築していますので、安心して継続的・発展的なサポートを受けることができます。

さあ!まずは相談してみませんか!
 ご家族からのご相談も、もちろんお受け致します。

NPO法人 かたつむりの会

法人本部

住所 〒646-0043
和歌山県田辺市今福町119 中田ビル2F
ワークサポート・いこう内
電話 0739-25-3888 FAX 0739-33-7210
メール npo.katatsumuri@pearl.ocn.ne.jp



各施設図

町家カフェ上屋敷二丁目

(障害者就労継続支援A型事業所)

就労の場所です。週20時間以上働ける人は
雇用保険にも加入しています



営業時間 9:00~14:30
(月曜定休日)

住所 〒646-0036
和歌山県田辺市上屋敷2-6-31

電話 0739-20-5595

メール npo.katatsumuri@pearl.ocn.ne.jp



ララロカレ RaRaLocale

(障害者就労継続支援A型事業所)



営業時間 9:00~18:00
(火曜定休日)

住所 〒646-0036
和歌山県田辺市上屋敷2-6-7

電話 / FAX 0739-34-2146

メール rara-locale@crocus.ocn.ne.jp

レトロな元公民館を
改装して生まれた
パスタとパンの
レストランです。

2階はライブや展示会
などのイベント会場
として利用できます。



ワークサポート・いこう

(障害者就労継続支援B型事業所)

銀座通りにあるビルの1室です
街なかのおしゃれな空間で
作業をしています。
働くことの土台作りを
目指すと共に、少しずつ
工賃も得ていきます。



開所時間 月~金曜 9:30~16:00
(イベントの都合で変更する場合があります)

住所 〒646-0043
和歌山県田辺市今福町119

電話 / FAX 0739-25-3888 / 0739-33-7210

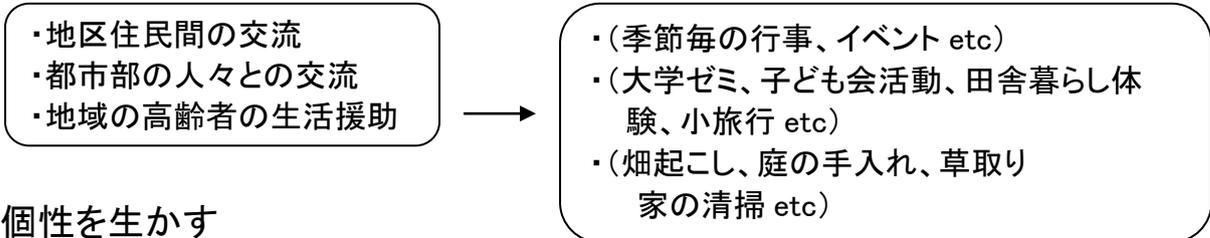
メール npo.katatsumuri@pearl.ocn.ne.jp

特定非営利法人 共生舎

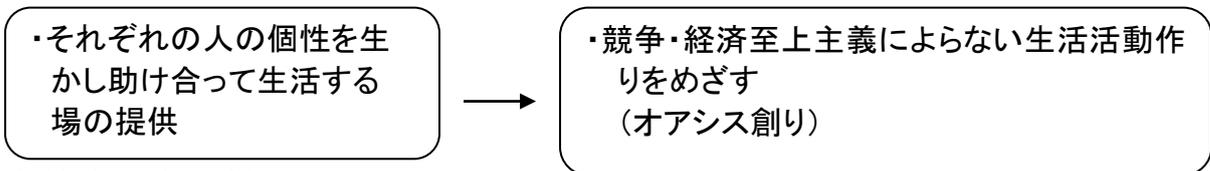
私共 NPO 法人共生舎は社会福祉法の制度に依らずそれぞれの立場の者がその個性を認め生かし、お互いに助け合って生活していくという理念の下に活動しております。

主な活動

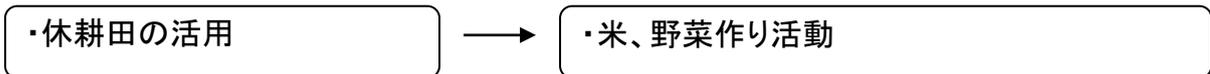
・助け合い



・個性を生かす



・自給自足をめざす



活動の場

・山あい拠点

田辺市(旧大塔村)面川 510 共生舎 古民家 定員 10 名

ただいま活動に共鳴していただける方を求めています

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 正会員になる。(年会費 5,000 円) 2. 共生舎のPRをしていただける方 3. 上記行事などへのボランティアに参加していただける方 4. 財政的援助をしてくださる方(金額は問わず) |
|---|

連絡先 NPO 法人共生舎 田辺市面川 510
(Tel) 0739-62-0651

田辺市「ひきこもり」検討委員会設置要綱

(設置)

第1条 思春期・青年期にある者(以下「青少年」という。)にみられる「ひきこもり」の問題について、関係機関が相互に連携して一体となって取り組むことを目的として、田辺市「ひきこもり」検討委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(検討事項)

第2条 委員会は、前条に規定する目的を達成するため、次に掲げる事項について検討等を行う。

- (1) 「ひきこもり」の状態にある青少年についての支援活動に関すること。
- (2) 前号に規定する青少年に関する問題点等について検討すること。
- (3) 「ひきこもり」の予防活動に関すること。
- (4) 「ひきこもり」に関する研修や研究会に関すること。
- (5) 前各号に掲げるもののほか、委員会の目的達成のために必要な事項に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、委員42名以内で組織する。

2 委員は、学識経験者、民間支援団体、医療・保健・福祉・教育関係機関、市職員等のうちから、市長が委嘱し、又は任命する。

3 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の在任期間とする

(委員会)

第4条 委員会に委員長及び副委員長2名を置き、委員の互選によりこれを定める。

2 委員長は、会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2 委員会は、委員会の委員の代表による小委員会を設置し、定期的に会議を開き、その結果は委員会へ報告する。

3 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の意見又は説明を聴くため、その者に委員会への出席又は文書の提出を求めることができる。

(事務局)

第6条 委員会の事務局は、保健福祉部健康増進課に置く。

(その他)

第7条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成17年5月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成 25 年4月1日から施行する。

Ⅲ-5. 田辺市ひきこもり検討委員会 委員構成

		選出区分	備考(選出団体・役職名)
委員長	1	福祉関係団体・機関	社会福祉法人やおき福祉会
副委員長	2	民間支援団体	NPO法人ハートツリー 南紀若者サポートステーション
副委員長	3	民間支援団体	NPO法人ハートツリー ひきこもり者社会参加支援センターハートツリー
小委員	4	学識経験者	
小委員	5	福祉関係団体・機関	社会福祉法人ふたば福祉会
小委員	6	保健機関	田辺保健所(精神保健福祉相談員)
小委員	7	医療関係者・団体・機関	紀南こころの医療センター(臨床心理学博士)
小委員	8	医療関係者・団体・機関	臨床心理士会(臨床心理士)
小委員	9	田辺市行政	教育委員会学校教育課
小委員	10	田辺市行政	教育委員会生涯学習課
小委員	11	田辺市行政	障害福祉室
小委員	12	田辺市行政	健康増進課
	13	学識経験者	
	14	民間支援団体	共生舎
	15	青年会議所	白浜・田辺青年会議所
	16	福祉関係団体・機関	NPO法人かたつむりの会
	17	福祉関係団体・機関	紀南児童相談所
	18	医療関係者・団体・機関	精神科医師
	19	医療関係者・団体・機関	紀南こころの医療センター(精神科医師)
	20	教育関係機関	田辺市教育研究所
	21	教育関係機関	田辺市養護教諭研究会
	22	教育関係機関	和歌山県教育センター学びの丘
	23	教育関係機関	紀南六高校代表
	24	教育関係機関	西牟婁養護教諭研究協議会高校ブロック代表
	25	民生委員・児童委員	龍神地区
	26	民生委員・児童委員	大塔地区
	27	民生委員・児童委員	中辺路地区
	28	民生委員・児童委員	本宮地区
	29	民生委員・児童委員	主任児童委員
	30	田辺市行政	保健福祉部長
	31	田辺市行政	子育て推進課
	32	田辺市行政	商工振興課